

# 聖徒の道



## 末日聖徒イエス・キリスト教会

### 大管長会

スパンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

### 十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・ハンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ベリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

### 顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシュ

### 国際機関誌

#### 編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

#### 編集副主幹：

キャロル・モーゼス

#### 子供の頁編集：

ハイデイ・ホルフェルト

#### デザイナー：

ロジャー・ギリング

## も く じ

あなたはどこへ 行こうとしていますか	N・エルドン・タナー	1
高価なる真珠 ——この特異なる聖典	ジェームズ・R・ハリス	6
古代の家族の系譜		14
神につける民とは	ロドニー・ターナー	19
聖書が回復の業の中で 果たした役割	ロバート・J・マッシューズ	27
木から材木へ	アラン・W・ファアラント	29
トボガンぞり	エルドレッド・G・スミス	30
私の日記	レイ・メリット	32
おもちゃばこ		35
みんながいるよ		36
ジョセフ・スミス訳聖書		45
新・旧約両聖書に 見られる不変の福音	エリス・T・ラスムッセン	46
ナイジェリアとガーナ	ジャネット・ブリガム	51
実行！	ロバート・L・シンプソン	57
ローカル・ニュース		61

### 聖徒の道 2月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30

印刷所 株式会社 精興社

配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19

定 価 年間予約2,200円

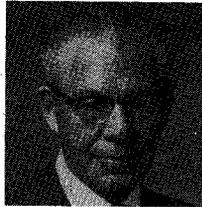
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0493JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

## あなたはどこへ 行こうとしていますか



第一副管長

N・エルドン・タナー

**私**の知っている人で、まったく同じと言ってよいほど似かよった人生のスタートを切ったふたりがいます。ふたりとも同じ町に住む活発な末日聖徒の両親のもとに生まれました。ふたりは同じワード部に所属し、同じ教師から教えを受け、監督も友人も、さらには学校までも同じといった具合でした。

ところが現在、このふたりは仕事の面だけでなく、その人生観や霊性の面でもまったく違ってしています。確かにふたりとも仕事の上では成功を収め、経済的にも恵まれた立場にあります。しかし、似ているのはそこまでです。ひとりには教会でも責任ある地位に召され、両親を敬う子供たちに恵まれ

ています。彼の息子、娘たちは福音の教えに従って生活し、自分たちの立派な両親は無論のこと、教会や地域社会の誉れとなるように努力しています。

一方、もうひとりには教会から徐々に離れて行き、教会員でない女性と結婚しました。そして、やがて何人かの子供たちの父親となったのですが、ともかくふたりの子供がスピード違反、飲酒運転、薬物の乱用などの違法行為を始終起こしたようで、彼には悩みが絶えません。

私たちの周りにはこのように対照的な生き方をしている人がいます。そのような生き方に対して私はよしあしを判断するつもりはありませんし、口を出す筋合もありません。

せん。しかしながら、後者の男性が必死の思いで私のところに助言を求めて来た時に私が思ったのは、人々を信仰から引き離す影響力が存在するという事です。このふたりの男性を現在の状態に至らせたそれぞれの生活環境をあれこれ考えていると、エペソの教会の長老に対するパウロの警告の言葉が心に浮かんできました。パウロはこのように言っています。

「どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。

わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。

また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲がったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。」(使徒20：28—30)

後にパウロは、イエス・キリストの福音を受け入れたコロサイ人の愛と忠実さと希望を神に感謝した後で、次のように警告しています。

「あなたがたは、むなしいだましごとの哲学で、人のとりこにされないように、気

をつけなさい。それはキリストに従わず、世のもろもろの靈力に従う人間の言伝えに基くものにすぎない。」(コロサイ2：8)

人の考えに基づく哲学に惑わされる人がいる一方、信仰によって様々な福音の教えを受け入れることのできる人がいるのはなぜなのでしょう。中にはトマスのような人もいます。トマスは、復活したイエスが来られた時、ほかの十二弟子と一緒にいませんでした。主にお目にかかったことを聞いた時のトマスの言葉を皆さんは御存じでしょう。このように言っています。

「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない。」

8日の後、イエスが再び来られた時、トマスは他の弟子たちと一緒にいました。イエスはトマスに言われました。

「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

そして、やっと真実を認めたトマスに、救い主はこのように言っておられます。

「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである。」

(ヨハネ20：25、27、29)

私たちは、今の世の中ほど論争や不明確

なことが多く、また反キリスト感情が高まっている時はなかったと考えていないでしょうか。もちろん、世界の人口が増加したことを考えればそれも事実かもしれませんが、異論をとこな人々や迫害する者、人々を惑わせて父なる神の神聖な計画をくじこうとする偽予言者はいつの時代にもいました。

1909年10月の大会で、ジョセフ・F・スミス大管長は次のように語っています。

「ことによると今日ほど偽予言者の多い時代、夢想家や偽キリストの多い時代はかつてなかったかもしれない。私たちはそのような人々から手紙で、いろいろな指図や脅迫をはじめとして、勧告や警告、彼らが受けたという啓示をほとんど毎日のように受けている。

……愚かな考えを起こす者、自分の手で何か教会のようなものを作る者には、その者と同程度に愚かで無知な者たちが必ず追随する。その主張するところがどんなに矛盾をはらんだものであってもである。忠実な末日聖徒には、神が知りたもうように、真理を知る権利が与えられている。日の光栄の王国の下にあるどんな力も、忠実な末日聖徒を迷わせたり、理解を曇らせたり、心を鈍らせたり、イエス・キリストの福音の原則に対する信仰や知識を曇らせることはできない。これは不可能である。なぜなら、

神の光は虚偽や誤りの明かりよりも強く輝いているからである。従って、キリストの光、啓示のみたま、神の知識を持つ者は、世のこれらの気まぐれを超越する。末日聖徒はこの教義を知っている。そしてこれが神の教えであり、人の教えでないことも知っている。」(Conference Report 「大会報告」1909年10月, pp. 8—9)

大変幸せなことに、私たちは福音を知り、キリストが遣わされた目的を理解しています。また私たちは神の予言者によって導かれ、イエス・キリストの福音の真理を証する教会幹部やその他の指導者の証に勇気づけられています。私たちは自らの努力によって、この業が真実なものであることを知るようにと励まされています。自ら学び、祈ることによってだれもがこの証を得ることができます。

1935年10月の総大会で、当時十二使徒定員会会員であったスティーブン・L・リチャーズ長老は、次のように語っています。

「霊に関する事柄を理解するには、科学やその他宗教に関係のない事柄を理解する場合と同様、高度の知性が要求されると思う。科学の分野や実業の分野、その他あらゆる世俗的な事柄における業績とまったく同様に、宗教の分野での業績や偉業も価値ある立派な、偉大なものであると私は考えている。

けれどもまた、私はこのことを信じる人が世の中にそう多くはないようにも思う。私は確信しているが、世の人々は霊的な生活や宗教活動の真の役目、価値というものを自分だけの判断によって非難しているため、宗教団体や霊的な概念、いわゆる自然界という枠を越えたこの大いなる世界と手を結ぶことを避けてきた。私には、このことが人類を襲い得る最大の不幸であるように思える。そして残念なことではあるが、教会の若人たちは、これまで人の精神や考えを飲み込んできたこの世の思想の影響から離れられないでいるように思えるのである。」

このように、この世の思想は霊界の存在を否定するものが多いのですが、リチャーズ長老は、そうした思想の影響を受けている若人たちを深く憂えて、次のように述べました。

「意図的にではないにしても、若人への教育が現在のそうした状況に大きな影響を及ぼしていることは事実である。信仰を失い、古来の習慣や伝統から離れた若い男女が多数見受けられることは、疑いようがない。なぜなら、昔ながらの習慣や伝統がなおざりにされてきただけでなく、教育制度やそれをあずかる指導者によって意図的に無視され、また時には非難されてきたからである。

私は、この国の教職にある方々に、生徒たちが自分の先祖の信仰に影響を及ぼすこうしたあらゆる問題について心を広く持つように励まして下さるようお願いするのであるが、これは、私たちの教会の心情であるばかりでなく、若人に自分たちの姿勢や神の教え、伝統を伝えようとするすべての善良で信心深い人々の心情でもあると確信している。

私たちは、この数十年の間きわめて顕著だったあらゆる科学の変遷や発達を非常に重視してきた。そのような物質の世界すなわち科学の世界にあって、信仰を失わせるのはいとも簡単なことである。言葉ひとつで彼らの信仰を根こそぎにしてしまうこともある。若人の考え方、人格の形成に影響を及ぼす立場にある方々は十分に配慮されるよう強く望むものである。

私はひとりの納税者であり、公立学校制度を支持する者である。私は公立学校制度を推奨し、民族文明化の最大の要因のひとつがそこにあると考えている。また私は常にこの学校制度を民主主義に不可欠の要素として考え、子供たちの教育をゆだねてきた。それと共にまた、教育を任せている人人に、いかなる手段であれ私の子供たちの信仰を傷つけ、信仰の道からそれさせるような言葉を口にしたり、そのような考えをそそのかしたりする権利はないとも考えて

きた。

特に私たちの教会の若人は、信仰の道からそれさせようとする影響を受けやすい。それは、(私の考えでは)彼らがキリストの福音を必ずしも十分に、また正しく理解していないからである。時々私は、彼らがあまりにも戒めや禁じられていることを気にしすぎて、肯定的で、美しく、喜びと元気を与えてくれるキリストの福音を十分に味わえないのではないかと心配することがある。……

ともかくも若人たちが望む永続的な満足感、つまり人生の本当の喜びや楽しみは、福音の原則を実行することによって得られるのであり、福音の原則に背いては得られないことを、私たち自身が若人に教えることができたなら私は思っている。」(Conference Report「大会報告」1935年10月, pp. 94—96)

神の戒めに従わなければ幸福も心の平安もありません。福音を受け入れ、その教えに従って生活しなければ、救いすなわち永遠の生命にはあずかれないのです。また世界の諸国や人々が直面している問題で、イエス・キリストの福音によって解決できないものはありません。イエス・キリストは私たちに生命と救いの計画を与え、それによって私たちが幸福を味わい、永遠の生命を受けられるようにするためにこの世に来

られたのです。

エペソ人に宛てたパウロの手紙を思い起こして下さい。

「からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。

主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。

すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。……

そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧師、教師として、お立てになった。

それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、

わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。

こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起る様々な教の風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、

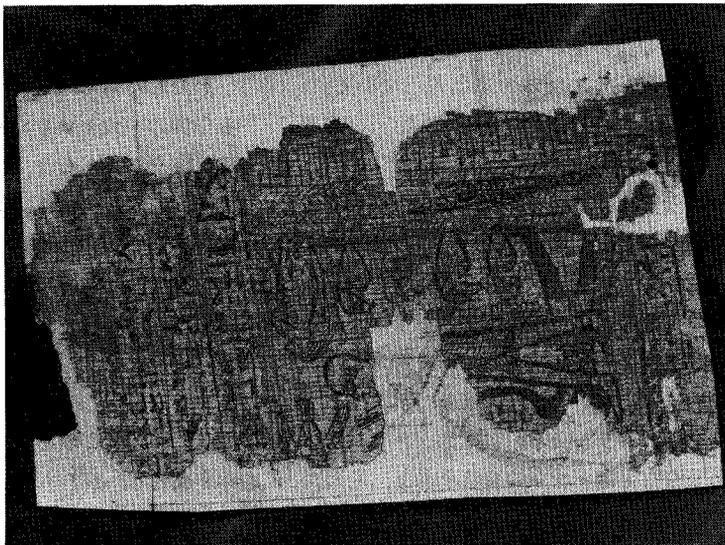
愛にあつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである。」(エペソ 4 : 4—6, 11—15)

# 高価なる真珠

## —この特異なる聖典—

ブリガム・ヤング大学  
古代聖典学助教授  
ジェームズ・R・ハリス

予言者ジョセフ・スミスが高価なる真珠、アブラハムの書の第一の挿画を写し取ったバビルスの原本。この貴重な写本は他の10枚のバビルスと共に予言者ジョセフ・スミスが所有していたものであるが、1966年の初めに再発見され、翌年の11月27日にニューヨーク州メトロポリタン博物館から当教会に寄贈された。



あなたは「高価なる真珠」についてどの程度知っていますか。次の質問に答えて、この最も短い標準聖典に対するあなたの知識を試してみましよう。

### 正誤問題

- 1 モーセの書とジョセフ・スミスの著第1章は、ジョセフ・スミスが靈感により改訂した聖書の一部である。
- 2 モーセの書の一部は聖書から完全に失われた聖文を回復したものであり、他の部分は現存する聖典を改訂したものである。
- 3 アブラハムは「族長らの記録」をもとにして彼の記録をまとめた。
- 4 公表されているのはアブラハムの書の一部だけである。
- 5 サタンはモーセを誘惑した。
- 6 秘密結社は、モルモン経の民の中にその起源がある
- 7 この世の創造において、高貴にして偉大なる霊たちがキリストを補佐した。
- 8 エノクは最初、神に仕えるという召しを拒んだ。
- 9 この地上で記された最古の聖典は、アダムの覚えの書である。
- 10 福音は最初の人アダムに教えられ、彼はバプテスマを受けた。
- 11 福音の神権時代は数多く存在したが、高価なる真珠には7つの主な神権時代について述べられている。

[答：6番以外はすべて正]

- 
1. モーセの書とジョセフ・スミスの著第1章は、ジョセフ・スミスが靈感により改訂した聖書の一部だろうか。
- 

モルモン経は、聖書から「誰にもわかる非常に貴い多くの部分」が取り去られたことを明らかにしています。この失われた聖文は回復されるのでしょうか。(1ニーファイ13：34参照)果たして原本のままの聖書が回復されるのでしょうか。

1830年6月、ジョセフ・スミスと組織されて間もない教会は、激しい迫害に見舞わ

れていました。主はそのような苦難の最中にある聖徒たちを力づけ支えるために、後にオルソン・プラットが「モーセの示現」と名付けた啓示を与えられました。この啓示は教会の教義面での発展に大きく寄与しましたが、そればかりでなく、試練と艱難に耐え忍ぼうと苦しむ予言者ジョセフとその同胞を即座に力づけたのでした。予言者ジョセフはその啓示について日記に次のように記しています。

「しかしながら、私たちが切り抜けねばならないあらゆる試練と艱難の中にある時、私たちのまだ組織されたばかりでぜい弱な状態をよく知っておられた主は私たちを励

まされ、『規則に規則を加え、ここにもすこしくかしくにも少しく教え』を授けられたのである。次に挙げるのは貴重な小編である。)(モーセの書第1章が続く)」「(教会歴史」1:98)

ジョセフ・スミスはこの啓示を受けたすぐ後に、ひとつの計画を実行に移しました。それは、長年に亘って多くの時間と、研究と、祈りによる考察を必要とするものでした。すなわち、靈感による聖書の改訂を完成することでした。モーセの書は靈感により改訂された創世記から抜き出したもので、ジョセフ・スミスの著第1章は同じく改訂されたマタイ伝第24章にあたります。モーセの書は予言者ジョセフの存命中に編纂され、順次印刷されました。(ジェームズ・R・クラーク博士の研究を基にした表を参照)

---

靈感により改訂された聖書からの抜粋	初版の印刷日
モーセ1:1-42	1844年1月
モーセ2:1-5:59	1833年4月(未刊)
モーセ6:1-42	1832年8月
モーセ6:43-68	1833年3月
モーセ7:1-69	1832年8月
モーセ8:1-30	1833年4月

---

2. モーセの書は聖書を改訂したものだろうか。それとも原本がそのまま回復されたものだろうか。

---

モーセの書を構成する8つの章には、他

の聖典には記されていない完全に回復された聖文が数多く見られます。いわゆるエノクの予言からの引用と呼ばれる部分は、モーセの書の中で、また恐らくは靈感により改訂された聖書全体の中で、最も広範囲にわたって回復された聖文でしょう。この啓示を記録する前に、予言者ジョセフは日記に次のように記しています。

「ここで主が永遠の福音を持つ小さな群れに勇気を与え、聖徒たちを強めていることが伺える。その永遠の福音とはモルモン経の中に啓示されていて、聖書の聖句にさらに説明を加えるものであり、その翻訳はすでに開始されていた。旧約および新約聖書の随所に言及されている書で現在残っていないものに関して、聖徒たちの間に数人の推測や憶説が流れたが、大方の見方はそれらの書物が『失われた』というものだった。しかし使徒の教会はこれらの書の幾つかを所有していたらしい。なぜならユダがアダムから数えて第7代目の予言者エノクの予言について述べ、あるいは引用しているからである。しかしながらコールズビルからカナンダイガまですべて合わせて約70名の小さな聖徒の群れは喜んだ。主がエノクの予言の中から次にあげる古代の人々の行ないの数々を啓示されたからである。」「(教会歴史」1:131-33)

エノクの予言については、時の絶頂における教会の中では知られていましたが、1830年12月に回復されるまで近代のキリスト教会からは失われていました。この予言がもたらした知識により、教会員はエノクのシオンに倣ってシオンを建設しようとするよう大いに勇気づけられたに違いありません。モーセの書第1章の回復と同じよう

に、教会の促進を強化するものとなったのです。

---

3. アブラハムは、族長らの記録をもとにして彼の記録を書いたのだろうか。

---

「先祖すなわち族長らの記録」は代々守られてアブラハムに伝えられました。彼はこの記録から靈感を受けて次のように述べています。「されば、わが後に来るべき子孫のため、この記録にある若干かのことを努めてここに誌すべし。」(アブラハム1:31)

---

4. アブラハムの書は、すべて公表されたのだろうか。

---

アブラハムの書として現在知られている部分は、ノーヴーの定期刊行誌「タイムズ・アンド・シーズンズ」に1842年3月1日から5月16日にわたって掲載されたものです。1843年2月、ジョン・テイラーがジョセフ・スミス跡を継いで編集長になりました。彼は購読者に宛てた記事の中で、「ジョセフ兄弟は、アブラハムの書から抜き出された聖文をさらに明らかにすると約束している」と記しました。しかし、周囲の状況がそれを許さなかったようです。

アブラハムの書のまだ明らかにされていない部分には何が書かれているのでしょうか。これは推測にすぎませんが、エジプトでのアブラハムの経験が引き続き記されているのかもしれませんが、というの、第1章の

前に挿入されている「アブラハムの書より採録せる写の第1」が、第1章の内容と関係があり、第3章の前に挿入されている「写の第2」が、第3章の内容を補っているからです。このことから推論すれば、「写の第3」はエジプトにおけるアブラハムの経験について記した章に先立つものです。つまり、この挿画はアブラハムの書の失われた部分を表わしているのです。

この記録の内容がどれほど広範囲に及んでいるのか確かめるのは、不可能なことです。3章15節によれば、アブラハムは神が啓示された真理をエジプト人に教えるという召しを受けました。そして、天体や前世、予任、創造に関する原則を明細に説いています。そのほかにどのような福音の原則を教えたのでしょうか。第3の挿画の説明には、「王の宮廷に於て天文の原理につきて論ず」と記されています。アブラハムはこうして主が命じられたことを遂行したのです。パロはアブラハムを王座に座らせて、家の者と共に教えを仰ぎましたが、なぜそのようにしたのか、理由は明らかになったことと思います。

---

5. サタンはモーセを誘惑しようとしたのだろうか。

---

誘惑しました。(モーセ1:12—23参照) このように重要で劇的な出来事が、モーセが記した聖書の中に見当たらないのは不思議なことです。モーセ1:23には、世の罪悪のためにこの出来事は人の子らの間から隠されたと記されています。しかし今や、

ジョセフ・スミスを通して、このことが人の子らの間に再び明らかにされたのです。

「サタン」や「悪魔」という名称あるいは称号は、創世記のいずれの章にも記されていませんし、聖書のモーセの五書の中にも見当たりません。しかし、高価なる真珠のモーセの書には、最初の7章の中に32回も現われています。サタンの存在は、たとえイスラエルの陣営全体には知られていなかったとしても、アダム、カイン、ラメク、エノク、そしてノアははっきりと理解していたようです。高価なる真珠からサタンについて以下のことがわかります。

- a. サタンはモーセの生涯においてモーセを激しく、また執拗に誘惑した。(モーセ1：12—22参照) モーセから離れ去るまで四度「退け」と命じられている。
- b. サタンは相当な力を有する一個の存在で、神の独り子イエス・キリストに対する揺るぎない信仰を持つ人だけがサタンを退けることができる。信仰の篤いモーセでも、力強い信仰の祈りを通して主から力を授かるまでは、サタンを震えおののかすことはできなかった。(モーセ1：19—23参照)
- c. 天上から落とされ墮落した状態にいるサタンは、光の力に対抗し、人を欺き、あらゆる善い業や人を強め信仰を育む行ないを妨げようとする。アダムの時代から世のあらゆる時代を通じて、サタンは聖徒たちに戦いを挑んできた。(モーセ4：4；6：49；教義と聖約76参照)
- d. サタンは自由意志により自ら公然と神に反抗し、悪の象徴となったひとりである。サタンが見せかけだけの救い

の計画を提示したことは、次の言葉から明らかである。「われことごとく人類を贖いて一人だに失うことなからしめん。」サタンは人々を神に対する信仰から遠ざけるあらゆる哲学や策略を駆使し、また手下を使って、偽りのプログラムを教え続けてきたのである。さらにこの言葉は悪の根源が何なのかを明らかにしている。(モーセ4：1—4参照)

「この地球上の人類に関する限り、罪悪は前世にその端を発している。永遠の御父は霊の子供たちをもうけて、彼らが成長できるように律法を定め、自由意志を授けられた。神のこうした律法に対する不従順は、必然的に罪悪である。したがって、罪悪を犯す可能性がなければ、昇栄に向かって進歩する望みも存在しないのである。ルシフェルと天群の3分の1の霊は善よりも悪を選び、自由意志を義しく行使しなかった。そしてついには、主に向かって公然と反抗し、肉体を受けることなく地球に放逐された。(モーセ4：1—4；アブラハム3：24—28；教義と聖約29：36—40；黙示12：7—13)」(ブルース・R・マッコンキー、*Mormon Doctrine* 「モルモンの教義」)

---

6. 秘密結社はモルモン経の民の中にその起源があるのだろうか。

---

秘密結社は、ニーファイ人やジェレドの民を滅亡させる原因となったものです。(イテル8：21) しかし、その起源はリーハイ

がエルサレムを出発した時よりも、またジェレドの民が西半球に住みついた時よりも、はるかに古い時代にさかのぼります。

秘密結社はどこで始まったのでしょうか。モーセの書5章19節は、カインと秘密結社の起源について述べており、11節はその結社が地上に存続したことを明らかにしています。これらの結社の特徴は、「生ける神」のみ名により暗黒の誓約を厳粛に交わし（モーセ5：29—30）、仲間同士が強く結び、暴力と恐怖によって自らの力と利益を獲得することばかりを考えていることです。（モーセ5：51—55参照）

これまで数々の偉大な文明が、カインの秘密結社の力の前に崩壊しました。こうした歴史が再び繰り返される可能性があります。モロナイは後世の人々に次のように勧告しています。

「異邦人よ、これらのことをあなたたちに知らせるのは神のみこころにかなうことである。これを知ることによって、あなたたちはその罪を悔い改めることができ、また権力を奪い利益を得るために起されるこのような殺人結社を抑えて、あなたたちを支配させないようにすることができる。これだけでなく、もしこの結社をあなたたちの中におく時にあなたたちが受ける滅亡、すなわち永遠の神の正義の剣が頭の上へ落ちてきてあなたたちを亡ぼすところの滅亡をまぬがれることができる。

従ってこのような秘密結社があなたたちの間にできるのを見るときには、この結社のためにあなたたちが受ける境涯の恐ろしいことを思って自ら警めなくてはならない。これは主が仰せになる命令である。この命令を守らないと、すでに殺された者たちの

血が、土の中から叫んで秘密結社とこれを助ける者と共に報いたまえと主にねがい求めるから、その結社とこれを助ける者とは禍である。」（イテル8：23—24）

---

7. 高貴にして偉大なる霊たちはキリストを助けてこの世の創造に携わったのだろうか。

---

アブラハムの書に記されている創造に関する記述は、現存する書物の中で最も正確なものでしょう。その記述には、とても喜ばしく、また特異な知識を与える前置きの部分があります。それによれば、主はアブラハムに、「この世に先だちて組織されたる英智たち」（アブラハム3：22）をお見せになりました。

これらの英智たち（霊の状態の人々）は、高貴にして偉大なるもので、天における王や女王になる力を持っていました。アブラハムは、このような英智のひとりであって、生まれる前から選ばれていたと告げられました。高貴にして偉大なる霊の中に、「神の如き者」がひとりいて、次のように言われました。「われら降り行かん。かしこに空間あればなり。而してこれらの材料をとりて、これらの者の住まうべき地を造らん。」（アブラハム3：24）

「……神々最初に降り行きたまえり。而して彼ら、すなわち神々は、天と地とを組織し形造りたまえり。」（アブラハム4：1）

これらの聖句から、高貴にして偉大なる霊たちが地球の創造に携わり、「自分の救の達成」（ピリピ2：12）に努めたことが分か

ります。

---

8. エノクは最初、主に仕えるという召しを拒んだのだろうか。

---

エノクを取り巻く人間社会では、暴力と人間中心の考えが横行していました。人々は「暗黒の中に自らの謀ごと」を求め(すなわち、みたまにおいて考えることをせず)、「自らの憎むべき仕業の中に人殺しを」企みました。(モーセ6:28)

そのような民に伝道するという考えは、エノクの心を引きつけなかったようです。エノクは不平をもらしてこう言いました。「われは年行かぬ者に過ぎず、すべての人々われを憎む。われは口重き者なればなり、いかで汝の僕ならむや。」(モーセ6:31)

エノクのすべての反論は、命じたことを行なうようにという主の短い訓戒の言葉により一蹴されました。エノクの生命は守られ、彼の口は主の言葉に満たされ、その言葉はすべて成就して、山や河、獣や人が彼の中に宿る神の力に従ったのです。

エノクは主のみ顔を直接拝し、時の終りに至るまで人類の未来を示現で見ました。その中で最もすばらしい部分が、モーセの書第7章に記されています。この章は聖見者エノクの生涯を簡潔にまとめたものですが、エノクはイエス・キリストの誕生、伝道、死そして復活を示現で見て、キリストの証し人になったのです。

エノクは末日に起こる主な出来事を記していますが、その中には天に取り上げられたエノクの市が地上に帰ることも含め、か

つてはエノクを排斥して生命をつけねらい、シオンの社会を破壊しようとした世の中と、末日においてひとつになることが挙げられています。シオンの民になろうと努めている末日聖徒は、エノクのような信仰を発揮できるでしょうか。

---

9. 地上における最古の聖典は、アダムの覚えの書だろうか。

---

古代の族長たちは、聖霊に導かれるままに記録を記して、聖典の最初の著者になりました。父祖アブラハムはこれらの記録をもとにして、その子孫のために記録を残しました。

「……われは今後われ自らよりさかのぼりて創世の前に至る年代記を描かんと努むべし。そはわれがその記録を手に入れし故にして、今に至るまでこれを所有せり。……

されど、神権の権能に関する先祖すなわち族長らの記録は、主なるわが神わが手の中に守り置きたまいぬ。この故に……わが後に来るべき子孫のため、この記録にある若干のことを努めてここに誌すべし。」

(アブラハム1:28, 31)

「ここに一部の覚えの書誌する、その中に誌すところはアダムの言葉にてなり。そは靈感の『みたま』によりて書き誌すために、神を呼び求めたる者にみな与えられたればなり。

この者たちによりて、その子供たちは<sup>よ</sup>読書<sup>か</sup>を教えられ、その言葉は清くして汚れなかりき。

さて始めより在りしこの神権(神権の祝

福師の位)は、この世の終りにも在るものなり。

さて、アダム聖霊に感じてこの予言を語  
りた……りき。」(モーセ6：5—8)

---

10. 最初の人(アダム)は、福音を学んで、  
バプテスマを受けたのだろうか。

---

キリスト教の教義は、キリストがこの世  
で教えと導きを施される以前に、詳しく説  
かれていました。神は時の絶頂に至るまで、  
救いの完全なプログラムを人類に啓示され  
なかったではありません。最初にキリス  
トの福音を聞いた人はアダムでした。エノ  
クは世の人々に悔い改めを叫んだ時、その  
説教の中でアダムの教えを尊重するように  
訴えました。

また、エノクはどのようにしてアダムが  
バプテスマを受け、義認と清めの教義をは  
じめ、墮落と贖罪、イエス・キリストを信じ  
る信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊の賜  
を授ける按手礼について理解するようにな  
ったか説明しています。さらに、アダムが  
霊的に生まれ変わったことと、神の御子の  
神権の聖なる神権を有していたことを宣言  
しました。(モーセ6：51—68参照)

アダムのバプテスマについては、モーセ  
6：64に詳しく記されています。アダムは  
「主の『みたま』によりとらえられ行き  
て水の中に引き込まれ、水中に沈められて、  
また水の中より引き出されたり。」

について記されているだろうか。

---

この聖典の中には、7つの主な神権時代  
が描かれています。

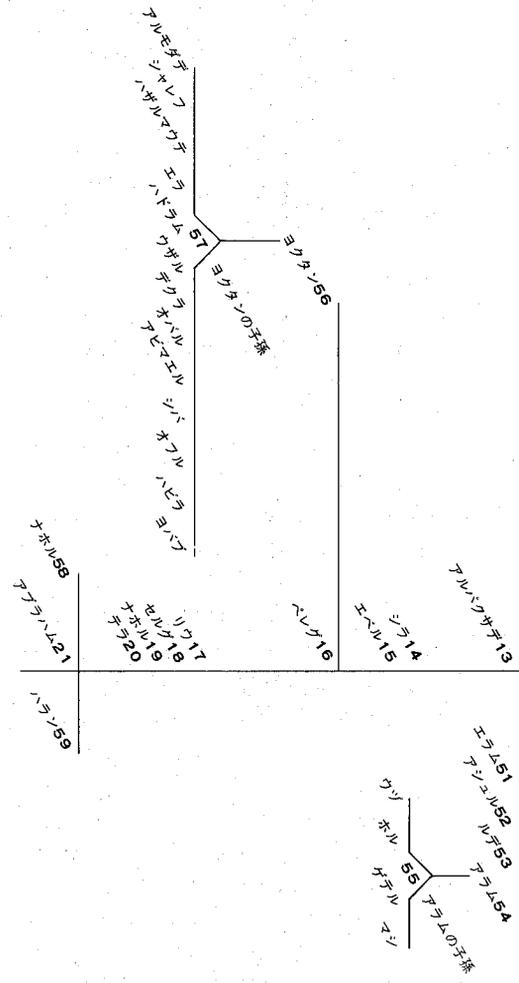
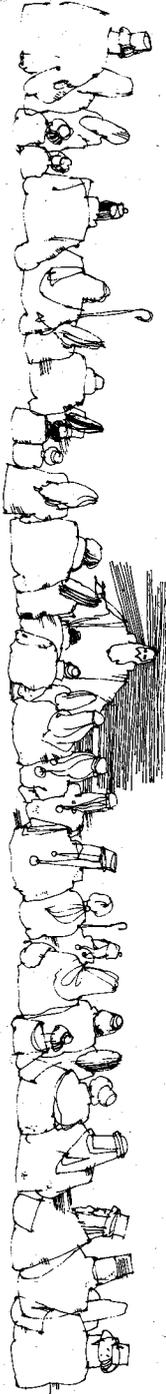
- a. アダムの神権時代……モーセ3, 4,  
5, 6
- b. エノクの神権時代……モーセ6：25  
—8：2
- c. ノアの神権時代……モーセ8：8  
—30, エノク  
の示現の一部
- d. アブラハムの神権時代……アブラ  
ハムの書すべて
- e. モーセの神権時代……モーセ1 (概  
括的な意味で  
は、モーセの残  
りの書も含む)
- f. 時の絶頂の神権時代…ジョセフ・ス  
ミス1
- g. 時満ちたる神権時代…ジョセフ・ス  
ミス2, 信仰  
箇条

高価なる真珠に述べられているこれらの  
神権時代に共通した考えは、すべての人が  
光と真理を進んで受けようとするならば、  
それを受けられることができるということです。  
またこの小さな書は主が地上に降りてきて、  
神との仲介者として社会に、また努力する  
人々に祝福を授けられた数千年間の状態に  
ついて言及しています。確かに、他に類を  
見ない特異な使命を持った書物であると言  
えるでしょう。その中には特定の真理と、  
神より啓示された高度な神学が記されてい  
るのです。

---

11. 高価なる真珠には7つの主な神権時代





1. アダム—「すべての人の最初なる者」(モーセ1:34), ミカエル(教義と聖約107:54), 「日の老いたる者」(ダニエル7:9), 「神権は初めにアダムに与えられた。彼は最高の管理者としての地位を得た。……主からその管理者としての地位と権能を受けた。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」pp.157, 169)。創世5:3—5; モーセ3:7; 6:10—12, 67; アブラハム1:3; 教義と聖約84:16; 歴代上1:1; ルカ3:38
2. イヴ(エバ)—創世3:20; モーセ426, 5:1—2
3. セツ—69歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:42)。創世4:26; 5:4—8; モーセ6:3, 13—16; 歴代上1:1; ルカ3:38
4. エノス(イノス)—134歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:44)。創世4:26; 5:6—11; モーセ6:3, 13—18; 歴代上1:1; ルカ3:38
5. カイナン(ケナン)—87歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:45)。創世5:9—14; モーセ6:17—19; 歴代上1:2; ルカ3:37。(注:ハムの息子, カナンと混合しないこと)
6. マハラレル(マハラリール)—496歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:46)。創世5:12—17; モーセ6:19—20; 歴代上1:2; ルカ3:37
7. ヤレド(ジェレド, ヤレデ)—200歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:47)。創世5:15—20; モーセ6:20—24; 歴代上1:2; ルカ3:37
8. エノク—25歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:48—49)。創世5:18—24; モーセ6:21, 25; 7:68—69; 8:1; 歴代上1:3; ルカ3:37。エノクとエノクの市は天に取り上げられた。(注:カインの息子のエノクと混合しないこと)
9. メトセラ(メツセラ)—100歳でアダムより神権を受ける(教義と聖約107:50)。創世5:21—27; モーセ8:2—7; 歴代上1:3; ルカ3:37
10. レメク(ラメク)—32歳でセツより神権を受ける(教義と聖約107:51)。創世5:25—31; モーセ8:5—11; 歴代上1:3; ルカ3:36
11. ノア—10歳でメツセラより神権を受ける(教義と聖約107:52)。創世5:28—32; モーセ8:8—30; 歴代上1:4; ルカ3:36
12. セム—セム族の始祖。創世5:32; 10:21; 11:10; モーセ8:12, 27; 歴代上1:4; ルカ3:36
13. アルパクサデー—創世10:22; 11:10—13; 歴代上1:17; ルカ3:36
14. シラ(サラ)—創世10:24; 11:12—15; 歴代上1:18; ルカ3:35
15. エベル—創世10:24; 11:14—17; 歴代上1:18; ルカ3:35。ユダヤの言い伝えでは、ヘブルの語源はエベルの名にあるとされる。

16. ペルグー「彼の代に地が分かれた」(欽定訳創世10:25より和訳。教義と聖約133:19—24をも参照)。創世11:16—17; 歴代上1:19; ルカ3:35
17. リウ(レウ) —創世11:18—21; 歴代上1:25; ルカ3:35
18. セルグー創世11:20—23; 歴代上1:26; ルカ3:35
19. ナホル—創世11:22—25; 歴代上1:26; ルカ3:34
20. テラー創世11:24—27; 歴代上1:26; ルカ3:34
21. アブラハム(アブラム) —創世11:26—27; 歴代上1:27; ルカ3:34
22. カイン—創世4:1; モーセ5:16
23. アベル—創世4:2; モーセ5:17;
24. エノク—創世4:17; モーセ5:42。  
〔注: ジェレド(ヤレド)の息子のエノクと混同しないこと〕
25. イラテ(イラド) —創世4:18; モーセ5:43
26. メホヤエル—創世4:18; モーセ5:43
27. メトサエル—創世4:18; モーセ5:43
28. レメク(ラメク) —創世4:18—19; モーセ5:43—44
29. ヤバル—創世4:20; モーセ5:45
30. ユバル—創世4:21; モーセ5:45
31. トバルカイン—創世4:22; モーセ5:46
32. ナアマー創世4:22; モーセ5:46
33. ハム—ハム族の始祖。創世5:32; モーセ8:12; 歴代上1:4
34. エジプトス—アブラハム1:21—23。  
ハムの妻であり、カインの子孫。
35. クシー創世10:6; 歴代上1:8。クシはその子孫と関連してよく「エチオピア」と訳される。
36. ミツライム—創世10:6; 歴代上1:8。ヘブライ語では「エジプト」
37. プテー創世10:6; 歴代上1:8
38. カナン—創世10:6; 歴代上1:8。カナンの子孫はカナン人と呼ばれ、彼らの住む地はカナンと呼ばれた。
39. エジプトス—アブラハム1:23—26。  
ハムとエジプトスの娘であり、エジプトの初代パロの母。
40. ミツライムの子孫—創世10:13—14; 歴代上1:11—12
41. ペリシテ—創世10:14; 歴代上1:12。ミツライムの子であるカスル人の出であり、ペリシテ人の先祖。

42. シドン—創世10：15, 19；歴代上1：13。(フェニキアの町シドンは彼の名にちなんで名づけられた)
43. ヘテ—創世10：15；歴代上1：13。子孫はヘテ人として知られている。
44. クシの子孫—創世10：7—8；歴代上1：9—10
45. ニムロデ—創世10：8—12；歴代上1：10。バビロニアの帝国の建設者で、ユダヤの伝承によれば、バベルの塔を建設したのもニムロデであった。
46. ヤペテ—創世5：32；10：1—2, 5；モーセ8：12, 27；歴代上1：4。アーリア人すなわちインド・ヨーロッパ族(聖典では異邦人と言われている)の祖と考えられている。
47. ヤペテの子孫—創世10：2；歴代上1：5。ヤペテの息子マダイは、その子孫との関係から通常メジャ人と訳される。また、ヤペテの息子ヤワンは、ヘブル語でイオニアと同一であり、ギリシャを意味する。
48. ゴメルの子孫—創世10：3；歴代上1：6
49. ヤワンの子孫—創世10：4；歴代上1：7。ヤワンの息子キッテムの名は、クプロ(キプロス)島とその住民に関連しても用いられる。
50. カナン人—創世10：16—18；歴代上1：14—16。ハムの息子であるカナンの子孫に与えられた一般的な呼び方。
51. エラム—創世10：22；歴代上1：17。チグリス・ユーフラテスの最南端部地域もこの名で知られていた。
52. アシュール—創世10：22；歴代上1：17。チグリス・ユーフラテスの北部地域もアシュールとして知られており、アッシリアと訳された。
53. ルデ—創世10：22；歴代上1：17。ルデの子孫は、一般にルデ人として知られている。
54. アラム—創世10：22；歴代上1：17。この名は、シリアとも訳される。
55. アラムの子孫—創世10：23；歴代上1：17。
56. ヨクタン—創世10：25—30；歴代上1：19—23。ペレグの弟で、13人の息子を含む大家族を擁していた。
57. ヨクタンの子孫—創世10：26—29；歴代上1：20—23
58. ナホル—創世11：26—27。祖父ナホルと同一の名を持つ。
59. ハラン—創世11：26—28；アブラハム2：1—2

# 神につける民とは

ロドニー・ターナー

**イ**スラエルの物語は、古今の一大叙事詩です。その展望ははるかに、永遠から始まって時を下り、再び永遠へと流れ込みます。御父は御自身のこの地上の土地を、イスラエルの民の数に照らして霊の子供たちに配分されました。

「いと高き者は人の子らを分け、諸国民にその嗣業を与えられたとき、イスラエル

の子らの数に照して、もろもろの民の境を定められた。主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。」(申命 32：8-9)

人類に与えられた壮大な計画を考えてみた場合、イスラエルはその中心です。キリスト(エホバ)が御父のすべての子供のうちの長子であるように、イスラエルは国々



の長子です。モーセはパロにこう告げるように命じられました。「主はこう仰せられる。イスラエルはわたしの子、わたしの長子である。」(出エジプト4:22)

そして、イスラエルが国々の長であるように、エフライムは十二支族の長です。イスラエルの末日における集合についてのエレミヤの次の予言は、読む人の胸を打ちます。「彼らは泣き悲しんで帰ってくる。わたしは慰めながら彼らを導き帰る。彼らがつまづかないように、まっすぐな道により、水の流れのそばを通らせる。それは、わたしがイスラエルの父であり、エフライムはわたしの長子だからである。」(エレミヤ31:9)

主なるキリストも、イスラエルも、エフライムも、それぞれ生得権を持った長子です。

アダムや、ノアの洪水以前の族長たちが霊においてイスラエルであったことは疑うべくもありませんが、現実のイスラエルの家は洪水後数世紀してから誕生しました。セムの子孫であるアブラハムがヘブル人の先祖と通常認められています。アブラハムは、聖なる神権の主権と力をもって地上を治めるべく予任された、神の「高貴にして偉大なる」子供のひとりでした。

主なる神がハランの地でアブラハムに姿を現わされた時、彼は62歳前後でした。

「わが名はエホバなり。われは始めより終りを知る。これを以て、わが手汝を覆わん。

われ汝を大いなる国民となし、汝を限り

なく恵み、汝の名をすべての国民の中に大いならしめ、汝は汝の末の子孫にとり祝福の基となりて、汝の子孫は万国の民にこの導きと教えを施す職と神権とを携えて行かん。

われ万国の民を汝の名によりて祝福せん。この福音を受くる者は皆汝の名によりて呼ばれ、汝のすえに教えられ、立ち上りて汝をその父として祝福すればなり。

われは汝を祝する者を祝し、汝を誣う者を誣わん。また汝(すなわち汝の神権)により、汝のすえ(すなわち汝の神権)による、そはこの権能は汝によりて継続し、また汝のすえ(すなわち文字通りのすえ、汝の体より出でたるすえ)によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん、すなわち福音の祝福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福を得んと言う約束を汝に与うればなり。」(アブラハム2:8-11)

主なる神のこの顕現を期して、新しい神権時代が始まりました。アブラハムは大いなる業の基を据える人であり、選ばれた民の族長として、福音を全人類にもたらす人でした。またアブラハムの子供たちは、世の光、地の塩となるはずでした。アブラハムの孫にあたるヤコブは、その12人の息子の誕生の後にイスラエル、すなわち「神と共に治める」という意味の新しい名前を授かりました。この呼び名の詰まるところは、日の光栄の王国に昇栄し、そこで永遠に神と共に統治する男女を意味しています。

旧約聖書は本質的に見て、カナンで生まれ、ハランに住み、エジプトで死んだセム



族の王子ヤコブの一族の、ロマンと栄光と、誉れと恥辱に満ちた物語です。英雄と悪漢、成功と失敗、それに賢人と愚人の物語です。

しかし、真、善、美をことさら求める私たちは、イスラエルの歴史に邪悪や虚偽や醜悪も塗りこめられていることをつい忘れがちです。

アブラハムは、父親の熱狂的な偶像礼拝、妻の不妊、家族の不和、さらにはぎりぎりまで心を試されるなど、苦労しました。イサクとリベカは、ヤコブに対する兄エサウの敵意が非常に激しいため、ヤコブが殺されはしないかと心配しました。またヤコブは、しゅうとに欺され、嫉妬深い妻たちに悩み、姉妹のデナを誘惑した仕返しに町の男をことごとく殺すという息子たちの所業に、不名誉を被りました。その騒動に族長ヤコブは、「あなたがたはわたしをこの地の住民……に忌みきらわせ、わたしに迷惑をかけた」（創世34：30）と言っています。

その後、この息子たちは異母弟を奴隷に

売り、死んだと報告してヤコブを悲しませました。そしてなお追い打ちをかけるように、長子ルベンの近親相姦がまたもヤコブの顔に泥を塗りました。

イスラエルの家の出現に関して他にも悲惨な出来事や恥ずべきことがありますが、一族の起こりに伴う矛盾した要素を示すには以上で十分でしょう。

イスラエルの劇の第一幕はヨセフの死で終わります。この出来事とモーセの登場までには数世紀という沈黙の間合があります。再び幕が上がると、イスラエルは現実にも霊的にも奴隷となっていました。その民をこの二重のかせから解放するのがモーセの使命でした。

彼らが神の力によって奴隷の身から解放されたことは、アロンが杖を投げ、モーセが手を差し伸べた時の出来事に見る通り明らかです。しかし、イスラエルは信仰薄い民でした。自分たちのために行なわれた奇跡にもかかわらず、近づくパロの軍勢を見

ると早々に不平を言い、水を分けた奇跡の1カ月後にシンの荒野に到着すると、またもやつぶやき始めました。

主が彼らに荒野をさまよう40年間の糧として初めてマナを授けられたのは、こうした時でした。民がさらにレピテムでも不平をこぼし、次いでシナイの荒野に宿営した時、恵み深い主はここで、彼らを御自身の選民、「祭司の国、また聖なる民」とすると言われたのです。(出エジプト19:6参照)

イスラエルは即座に、「われわれは主が言われたことを、みな行います」(出エジプト19:8)と応じました。この時、エホバは律法をモーセに啓示され、民は従順になるとモーセに約束しました。ところが、それから1カ月も経たないうちに、アロンが民の要求に屈して、金の偶像を作らせてしまったのです。

「民はモーセが山を下ることのおそいものを見て、アロンのもとに集まって彼に言った、『さあ、わたしたちに先立って行く神を、わたしたちのために造ってください。わたしたちをエジプトの国から導きのぼった人、あのモーセはどうなったのかわからないからです。』」(出エジプト32:1)

民が、自分たちが救い出されたのは神ではなく、モーセのお陰だと思っていたことに注意して下さい。イスラエルの民は奴隷の精神を脱することができていませんでした。こと霊の奴隷となると、個人や民全体に自由になろうという意志がなければ、いかに神とはいえ、人々を解放することはできないのです。

イスラエルの民は、自由になり、また自由であるための英知と光明と真理に欠けていました。無知蒙昧であったために、己れの手で造り出した偶像に救いを求めたのです。

主は怒り、彼らを滅ぼすと迫りましたが、モーセが道はずれた民のためにとりなしをして、ようやく難を逃れたのでした。しかしながら、キリストの律法に従う特権とメルケゼデク神権の祝福を、民は受けられませんでした。

もはやエホバはイスラエルと共におらず、イスラエルの家全体は、後の時代に至るまでエホバのみ前に出ることがなくなりました。真の自由を得るための手段であるキリストの律法の代わりに、俗世的な戒めの体系であるモーセの律法が与えられました。こうしてイスラエルは、再び自由になる機会を1400年も待たなければならなくなったのです。

聖書を批評する大方の人は、モーセの掟は近東の文化環境を反映したにすぎないと考えています。しかしモーセの律法はもともエホバから授けられ、それを僕たちが説明したものであり、意図するところはイスラエルの道徳と神に対する忠誠を、個人および全体としてより高い水準まで引き上げることでした。

モーセの掟には具体的に3つのおもな目的がありました。(1) 荒野で生まれたイスラエルのまだ純真な新世代が、墮落したカナン人の不道徳さきまりない危険な礼拝様式に毒されないよう守ること。(2) イスラ

エルに統一した律法を与えることにより、彼らとその律法に基づいて自らの時代の社会協定の一典型を解釈し、またさらに洗練したものにしていけるようにすること。(3) 救い主が時の絶頂に完全な福音を回復される時、イスラエルの民に真の自由を受けける備えができてるように、肉欲と奴隷の精神を捨てさせること。

この律法が目的を十分達しなかったのは、律法のせいではなく、律法に背いた民のせいです。イスラエルの民の不実ば、サムエルからイエス御自身に至る予言者たちの警告と悲嘆を招きました。慈悲をもって差し伸べる主のみ手も、民を霊のかせから救おうとするモーセの不屈の努力も、大して甲斐はありませんでした。モーセは告別の言葉の中で、エホバがイスラエルの民になしてこられた様々なことを民に想起させましたが、「しかし、今日まで主はあなたがたの心に悟らせず、目に見させず、耳に聞かせられなかった」(申命29:4)と述べています。

この忠実な予言者は、戒めを繰り返した後、民の前途にあるふたつの道を示して忠告しました。「わたしは、きょう、天と地を呼んであなたがたに対する証人とする。わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならぬ。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。」(申命30:19)

そのモーセの名は残っても、忠告はやがて忘れられました。忠実な人々がいる一方

で、偶像礼拝ののろいは諸悪を伴い、イスラエルに代々つきまといました。そしてソロモン王の代になって、偶像礼拝に対して法的な認可と支持が下りました。それまでの為政者にはなかったことでした。しかし、ソロモンが十戒の最初のふたつの戒めを破ることを公認したため、それがイスラエルに与えた害悪ははかり知れません。バール礼拝が紀元前8世紀を風靡したため、悔い改めを叫ぶエリヤの声は黙殺されました。

木や石でできた神への信仰は、現代の物質主義にも通じるさらに巧妙な偶像礼拝により、ますます盛んになりました。予言者イザヤは、真の宗教を相いれない儀式主義の偽善性をこう糾弾しています。

「主は言われる、『あなたがたがささげる多くの犠牲は、わたしになんの益があるか。わたしは雄羊の燔祭と、肥えた獣の脂肪とに飽いている。わたしは雄牛あるいは小羊、あるいは雄やぎの血を喜ばない。

あなたがたは、わたしにまみえようととして来るが、だれが、わたしの庭を踏み荒すことを求めたか。

あなたがたは、もはや、むなしい供え物を携えてきてはならない。薫香は、わたしの忌みきらいものだ。新月、安息日、また会衆を呼び集めること——わたしは不義と聖会とに耐えられない。

あなたがたは身を洗って、清くなり、わたしの目の前からあなたがたの悪い行いを除き、悪を行うことをやめ、

善を行うことをならい、公平を求め、しえたげる者を戒め、みなしごを正しく守り、

寡婦の訴えを弁護せよ。」(イザヤ1:11-13, 16-17)

祭司や一般大衆と、エリヤ、イザヤ、エレミヤ、ホセア、ミカのような人々の態度、信仰、行ないを対比すると、おのずとひとつの結論が導き出されます。イスラエルの偉大さは一般大衆ではなく、予言者たちに集中していたということです。

彼らは何と素晴らしい人々であったことか。彼らがもしも時代のイスラエルの民から導ばれていたならば、予言者の中の予言者が地上に来られた時に、彼を受け入れる用意が民にできていたことでしょう。しかし実際には、律法を授けた当の約束のメシヤは、その言葉と行為が自分たちの解釈に合わないからという理由で、律法の指導的



遵奉者たちから拒絶されたのでした。ユダヤ人に見る通り、イスラエルはやがて一神教に帰依しました。「イスラエルよ聞け。われわれの神、主は唯一の主である。」(申命6:4)

長い歴史を多神教で通してきた国家が、エホバに立ち戻る過程で、神の子と自称したのを理由にそのエホバを拒んだのは皮肉なことです。契約の民は約束の地に入った後、様々な偽りの神にぬかずきましたが、イスラエルの聖者であるイエス・キリストの前には、自分たちの信仰する「唯一の主」を怒らせてはならないとしてぬかずこうとはしませんでした。

モーセの律法は成就されましたが、それはイスラエルによってではなく、エホバ自身によってでした。キリストは自分の民に新しい律法、より高度な律法を示されました。モーセの律法のしきたりは子供のための規律であって、大人のものではなかったからです。パウロは次のように記した時ユダヤ教から解放された自分のことを考えていたのかもしれませんが。「わたしたちが幼な子であった時には、幼な子らしく語り、幼な子らしく感じ、また、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなった今は、幼な子らしいことを捨ててしまった。」(Iコリント13:11)

しかしユダヤ人は幼な子のままでした。以前の奴隷時代の名残りがいまだにつきまわっていました。彼らはキリストにある自由の「よきおとずれ」を拒み、霊のかせに舞い戻ってしまったのです。

イスラエルは、父祖アブラハム、イサク、ヤコブの教えと模範をないがしろにしたため、紀元前721年には十支族が、そして紀元70年からはユダヤ人が散乱することとなりました。それは跡形も残さぬ散乱でした。ユダヤ人の散乱に続いてたちまち大背教の長い夜がやってきました。そして今、十二支族の長子であるエフライムが、弟たちのために働く準備として国々から集められています。

しかしながらイスラエルが、昔主がこの言葉を使われた時に意図された通りの「神につける民」(Iペテロ2:9)となるまでには、まだしなければならぬことがたくさんあります。末日聖徒が自らを神につける民と呼ぶ時、それは特定の神学的概念と宗教習慣とに根ざしています。感情、感覚、体を持つ神、前世、死者のための儀式、神殿結婚、知恵の言葉といった事柄は、私たちが神につける民であることの証拠としてあげられます。

これらの尊い原則がユニークであることは否定できませんが、しかしそれはみな目標に達するための手段でしかありません。イスラエルの過去の歴史やパレスチナにおける歴史、それにアメリカにおける歴史も、教義や儀式や宗教的なしきたり一般がそれ自体で神につける民を生み出すものではないことをよく示しています。

では、神につける民とはどんな民なのでしょう。この言葉は聖書にしか出てきませんが、改訂標準訳聖書の「私の所有」という訳が本当の意味を反映しています。神

につける民とは、神との関係が尋常でなく、特別な形で神の特性にあずかっている人々です。エホバは、イスラエルが他のすべての国民と異なると言われたばかりか、その相違は徳性、霊性の優秀さにあるとも言われました。つまり、聖なる民であるがために神につける民となるのです。

使徒ペテロは同時代の聖徒たちにあてた訓戒の中で、イスラエルに関して持つエホバの大きな目的を繰り返し強調しています。「しかし、あなたがたは、……、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべきみ光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。」(Iペテロ2:9)

現代のイスラエルが、その実を生じて初めて、主につける民となることは明らかです。しかし、全体は各部分の集合体です。シオンの町は心の清い人々の集まりです。各々の末日聖徒が問わなければならないのは、「私たちは神につける民だろうか」ではなく、「私は神につける者だろうか」という問いなのです。靈感によって改訂された聖書のマタイ5:13-14には、「わたしはあなたがたに、地の塩になれと命じる。……わたしはあなたがたに、世の光になれと命じる」とあります。イエスは、弟子たちが塩である、光であると言われたのではなく、そうなりなさいと命じておられるのです。

アブラハムの契約の子孫は、人類の救い手となるべき使命を持っています。救いの教えを万人に宣べ伝えるために選ばれた人々なのです。

真の教会に加わり、神の予言者たちに導かれ、生命と救いの原則を教えられ、神権の祝福を受け、聖霊の言語に尽くせぬ賜を享受するのは特権です。多くがすでに与えられています。これから多くが求められることでしょう。現代のイスラエルが実際に神につける民となり、聖なる国民となるための手段はすでに備えられています。主も、主の真の弟子たちも道はずすことはありません。

かの喜ばしい日が来る時、エホバはついに神につける民を我がものとするでしょう。エノクの「聖なる市」のように、イスラエルは主の山に登り、主イエス・キリストに喜びまみえるのです。聖徒たちは主の所有となります。もはやイスラエルは、主に対する知識を予言者たちに頼る必要はありません。主があらゆる国民を裁き、主の民を清めるからです。

「ついにいと小さき者よりいと大いなる者に至るまでことごとく、その中に留まれるわれを知りて主に就ける知識に充たされ、目と目と相見、人々声を挙げ共に声を合せてこの新しき歌を唱わん。すなわち、

主は再びシオンを興しませり。主は恵みもてその民イスラエルを選び、かれらを贖いたまえり。そは、先祖の信仰と誓約とによりて恵みに入りしなり。」(教義と聖約84:98-99)

# 聖書が 回復の業の中で 果たした役割

ロバート・J・マシューズ

聖書は最初の示現への導因となっただけでなく、聖書以外の聖典の存在を明らかにし、さらに他の啓示が与えられる糸口をもたらした。また、福音の重要な原則の回復にも寄与した。





アダム



セツ

末日聖徒イエス・キリスト教会は聖書には古代の予言者に示された神のみ言葉が載せられているという見解に基づいて、聖書を信じているということをこれまで変わることなく宣言してきた。予言者ジョセフ・スミスは、人は「聖なる書物に神御自らの手による言葉を見ることが出来る。そしてしばしば聖典を読む人は、そのことに無上の喜びを感じるであろう。またそれに通じている人は、そのすべての中に（神の）み手を認める」と言っている。（ジョセフ・スミス、*Teachings of the Prophet Joseph Smith* 「予言者ジョセフ・スミスの教え」 p. 56）

言うまでもないことであるが、聖書は最初に書かれた時の姿をそのままにはとどめていない。そのことについてジョセフ・スミスは次のように述べている。「われらは、正確に翻訳されたる限り、聖典は神の御言葉なりと信ず。」（信仰箇条第8条）ここで用いられている「翻訳」という言葉の中には、書写という意味も含まれていると考え

て然るべきである。つまり誤りは、ある言語から別の言語へと翻訳されていく過程においてだけでなく、同じ言語でも、ひとつの稿本から筆記転写して他の稿本を作るといった場合にもあったということである。聖書にある問題というものの主として脱落遺漏に関するものであることは明らかである。極端な誤りというものではないが、多くの重要な箇所が抜けているのである。このために意味の不明確な箇所が幾つか見受けられる。

ジョセフ・スミスはこの点について、さらに次のように述べている。「最初に書かれた時の姿をとどめているものである限り、私は聖書を信じる。無知な翻訳者、不注意な写字生、悪意を秘めた墮落した聖職者たちによる多くの誤りがある。」（「教え」 p. 327）

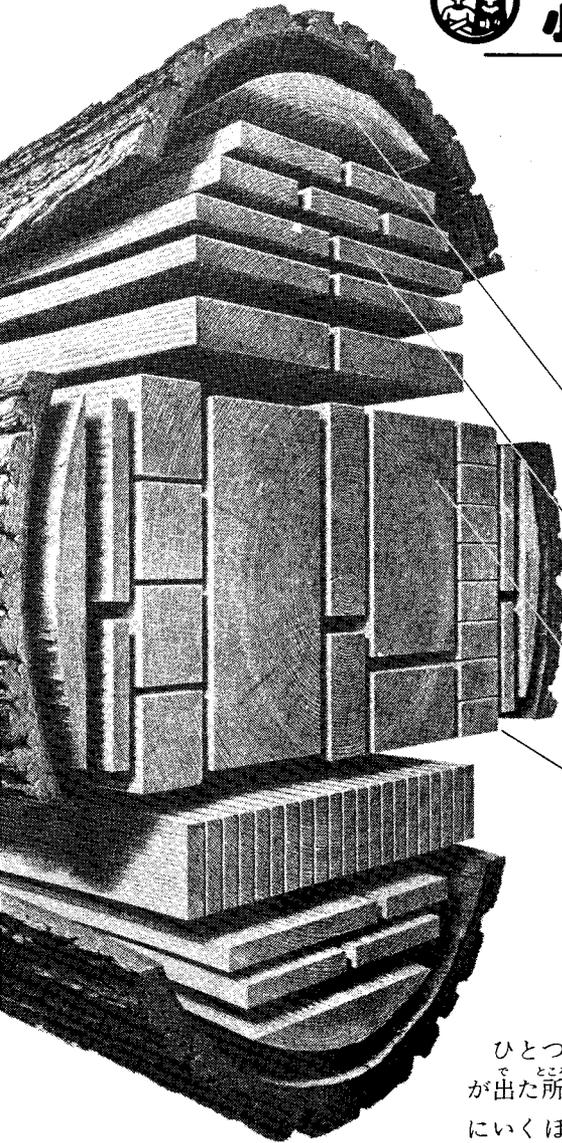
聖書はモルモン経の中ではユダヤ人の記録として紹介されているが、ほかにも幾つかが書かれている。最初予言者たちが靈感によって記録した時はわかりやすい



ちい

とも

## 小さなあ友だちへ



## 木から材木へ

アラン・W・ファーレント

木は、いくつかの段階<sup>だんかい</sup>を通して<sup>とお</sup>材木<sup>ざい</sup>になります（絵を見て下さい）。

- まず皮<sup>かわ</sup>をけずります。皮は、たき木<sup>たきぎ</sup>や根<sup>ね</sup>おおい<sup>おおい</sup>に使<sup>つか</sup>われます。
- この皮<sup>かわ</sup>は背板<sup>せいた</sup>と呼ばれ、木部<sup>もくぶ</sup>を残<sup>のこ</sup>すためにできるだけ薄<sup>うす</sup>くけずられます。
- この部分<sup>ぶぶん</sup>は節<sup>ふし</sup>が少<sup>すく</sup>いので、質<sup>しつ</sup>のよい板<sup>いた</sup>が取<sup>と</sup>れます。3~8センチの厚<sup>あつ</sup>さに切<sup>き</sup>ります。
- 木の中心部<sup>ちゆうしんぶ</sup>は、節<sup>ふし</sup>がたくさんあるのでよい材木<sup>ざいもく</sup>にはなりません。そこで、建物<sup>たてもの</sup>を支<sup>さ</sup>える柱<sup>はしら</sup>やはりなど、節<sup>ふし</sup>があつてもだいじょうぶなものに使<sup>つか</sup>います。

ひとつひとつの節<sup>ふし</sup>は、枝<sup>えだ</sup>のあつた所<sup>ところ</sup>、つまり枝<sup>えだ</sup>が出<sup>で</sup>た所<sup>ところ</sup>を表<sup>あら</sup>わしています。また、節<sup>ふし</sup>は木<sup>もく</sup>の中心<sup>ちゆうしん</sup>にいくほど多<sup>おほ</sup>く見<sup>み</sup>られます。これは、中心部<sup>ちゆうしんぶ</sup>が

一番古<sup>いちばんふる</sup>い部分<sup>ぶぶん</sup>だからです。若<sup>わか</sup>いうちに切<sup>き</sup>ったり折<sup>お</sup>られたりした枝<sup>えだ</sup>の節<sup>ふし</sup>は、木<sup>き</sup>が太<sup>おほ</sup>くなるにつれておおわれていきます。

人間のしもと<sup>おな</sup>と同じように、すべての木<sup>き</sup>には独特<sup>どくとく</sup>のもようがあります。木目<sup>もくめ</sup>は、木<sup>き</sup>によってひとつひとつ違<sup>ちが</sup>いますが、節<sup>ふし</sup>についても同<sup>おな</sup>じことが言<sup>い</sup>えます。

ト ボガンぞりは、私の小さい頃の  
大好きなスポーツでした。家の  
裏には山の斜面が限りなく広がって  
いたので、思うぞんぶんそりを楽し  
むことができました。ただひとつ問  
題といえば、私のそりにはひとりし  
かのれなかったということです。

10さい位のときのことです。ある  
日、ふたりの友達がいっしょに山の

上の小屋に行こうと私をさそいまし  
た。その小屋というのは、ただまわ  
りを波形のトタン板で囲ってあるだ  
けで、それも風に吹かれてぐらぐら  
していました。その板の先を少し曲  
げるだけで、トタン板はみごととな  
ボガンぞりに変わるのです。

放課後、私はかなづちを取りに家  
に帰りました。父が外に出ていたの

## ドボガンぞり



大祝福師名誉会員  
エルドレッド・G・スミス

で、こっそりと診療所しんりょうじょから持ち出し  
てきました。父は歯医者ちいしゃでした。

その年は大雪おおゆきで、日もすぐに暮れ  
ました。私たちは、思ったよりも長  
くそこにいることになってしまい、  
トボガンぞりができあがらないうち  
にうす暗くらくなってきました。

とうとう、そりはあきらめて、あ  
たりが見えるうちに帰ることになり  
ました。雪はひざまで積つもっている  
上に、山には道がありません。私た  
ちは、深い雪ゆきの中なかを急いで下りて行  
きました。

手はかじかんで、半分感覚はんぶんかんかくがあり  
ませんでした。突然、かなづちが手  
から落ちたような気がしました。し  
かし、そう思った時ときはおそく、かな  
づちは雪ゆきの中なかにうずもれてしまった  
後あとでした。友達ともだちを呼びましたが、待  
っているようすはありません。

私は、かなづちをさがしにひき返  
しました。しかし、一面真っ白ましろでか  
げも形かたちもありません。私は、我われを忘  
れてさがしました。

あたりはすでに暗くらなっていました  
た。私は雪ゆきの中なかにかなづちをさがし  
にひき返しました。たったひとりと  
だまって父ちちのかなづちをもち出した

ことをくやみました。あれは、父ちちの  
仕事道具しごとどうぐです。それを、なくしてし  
まったのです。どこを見ても出てき  
ません。

雪ゆきの上うえにすわりこんだ私は、悲し  
いのと、冷たいのと、さびしいのが  
いっしょになって、なき出しそうで  
した。ふと私は、助けたすけが必要な時ときは、  
どこにいても天父てんぷに祈いのるように教え  
られたことをおもいだしました。その  
時ときこそ、私は、助けたすけを必要ひつようとしてい  
たのです。私は、両手りょうてに顔かおをうずめ  
て心こころから祈いのりました。

目をあけて体からだを起おこし、わき道みちに  
転ころがり出でようとしたときでした。手  
が雪ゆきの中なかに深く入はいって、何かかたい  
ものにさわりました。しっかりとつ  
かんで取り上げると、それは父ちちの、  
かなづちでした。

私は、祈いのりが聞きかれたことを天父てんぷ  
に感謝かんしゃしました。そして、はねおき  
ると、全速力ぜんそくりょくで友達ともだちを追おいかけました。

やっとふたりに追おいついた時とき、私  
は、その日ひ特別とくべつなことを学まなんだよう  
に思おもいました。私たちは決けつしてひと  
りではないこと、そして祈いのりは必ず  
聞きかれるということです。

4月18日

お田さんが、自分のまわりにおきたことを書きなさい、と言って、この日記ちょうを買ってくれた。

5月21日

学校から帰ってきてても、お田さんはまだパンをやいていなかった。そうやくそくしたのに。お田さんは、ベッドでまたねている。でも家の中を見ると、1日中ねむっていたみたい。

お父さんが帰ってくるまで、スーザンの家で遊んだ。それから夕ごはんを食べた。お田さんはおなかがすいていなくて、お父さんは少ししか食べなかった。

5月22日

ゆうべ、お父さんがわたしのところにきて言った。お田さんは、重い病気なので、わたしが家の中のことをもつとしなければならないって。きょう、はじめてお父さんがないのを見た。

もう夜です。きょうは1日中はたらいたのでつかれた。

5月24日

水曜日からお休み、うれしいな。学校へ行ってから家のことをするのはとってもたいへんだ。わたしはまだ10さいでよかった。とうぶんけっこんはしないわ。だって、家のことをしていたら遊ぶひまがないんだもの。スーザンは、わたしがいつしよに遊ばないから



## 私の日記

レイ・メリット

なまいきだつて。でもスーザンのお田さんは病気じゃないもの。

5月25日

きょうのプライマリリーは楽しかった。ハント姉妹が、ロレンソ・スノー大管長のことを話してくれて、「天のまど」というえいがを見た。

わたしの家にも天のまどが開かれた。お田さんが、ちゃんと洋服に着がえて食事を作ってくれたの。

みんなでいつしよに食事をして、お話したりわらったりした。お父さん

もじょうだんを言った。お父さんとわたして後かたづけをした。こんなとき、もっと兄弟がいたらなあと思うけど、でもそうしたらもっとおさがふえるかな。

5月29日

少しお休みしてごめんなさい。草が庭をせんりようしそうです。キンポール大管長は、家やまわりをきれいにしなさいと言っています。お父さんは毎日、わたしがすることを書いていきます。

前は、早くベッドに入って本を読むのが好きだったけれど、今はすぐねてしまう。開たく者になって、ろうそくや石けんを作ったり、キャンプファイヤーでお料理がしたいといつも思っていた。でも、もう思わない。草とりやおそうじをするだけでこんなにつかれるんだもの。

5月30日

きょうは、みんなで日曜学校へ行った。お母さんは、青い洋服を着てとてもきれいだった。開会の時、お母さんはお父さんのかたでねむっていた。でも、だれも気にしてなかった。聖さん会の後、みんなで少しさんぼして、あしたのことを話した。

6月10日

お母さんは、ねてばかりで何もしない。わたしだつてこんなことするのい

やだわ。10さいの女の子にお母さんの仕事は大へんすぎるもの。子供はいないけれど、何でもしなくちゃならない。がんばるしかないわ。

6月23日

ずつといそがしかったけど、楽しかった。土曜日に、お父さんといちごを20ポンドもつんだ。きれいにあらって、半分に切つてジャムを作った。ふたりで大声でわらった。たぶん、大きくて声が低いせいだと思うけれど、前はお父さんがこわかった。でも今は、ぜんぜんそう思わない。わたしが大きくなって、お父さんのことがわかるようになったからかもしれない。

7月6日

きょう、支部長のあかしを聞いた。体中がふるえるようだった。お父さんは、立っているいろいろなしゅくふくや家族のことを感しゃした。わたしは、なき出しそうだった。お父さんは、めがねの下のなみだも気にしなかった。お父さんがすわると、わたしが立ってしまった。自分でもおどろいた。何を言ったのかおぼえていないけど、体中があつくなった。今もまだあつい。

7月23日

きょう、ハント姉妹が来て、パンをやいてくれた。そのおいしかったこと。まだ口の中に残っているみたい。わたし、けつこんしたら、家にいてパンを

やくのが好きになりそう。子供たちもその方が好きにきまってるわ。テーブルをみがいたりするのはいいけれど、おふろのそうじはいや。スーザンの家みたいに4人も男の子がいなくてよかったと思うわ。男の子がおふろに入った後はきたないもの。

夜は、お父さんとわたしがこうたいでお田さんにモルモン経を読んであげるの。お田さんが好きだから。わたしは、ぜんぶはわからないけれど、読むといい気持ちになる。

お父さんは、わたしにいろいろなことを話すようになった。夜、お父さんは、お田さんがもうじき遠くへ行ってしまうと言った。お父さんは私をだいた。お田さんは、もう死ぬかも知れない。

8月8日

起きると、お父さんもお田さんもいなかった。ハント姉妹が朝ごはんを作っていた。お田さんが夜中に苦しくなったので、お父さんが病院へ運んで行ったのだそう。少しの間、わたしはハント姉妹の家に行くことになった。

8月12日

夜、お父さんが来てハント兄弟姉妹と話しているのが聞こえた。私のところに来てくれると思ったけれど来なかった。なぜかわからないけれど、わたしは起きてお父さんのところに行けなかった。

8月13日

目をさますと、ハント姉妹がいた。ハント姉妹が何を言おうとしているのかわたしにはわかった。「お田さんは、天のお父様のところに帰られたのよ」とハント姉妹は言った。わたしは、だまってうなずいた。ハント姉妹が出て行った後、わたしはふとんに顔をうずめてないた。

8月17日

おそう式のことはあまりおぼえていない。白い服を着たお田さんは、とっても幸せそうだった。ぜんぶゆめだと思っていた。早く起きてまた楽しい家族にもどらなくちゃと思っていた。ためしにほつたもつねってみた。みんな行ってしまつて、お父さんとふたりだけになった。ほんとうに静かだ。

9月10日

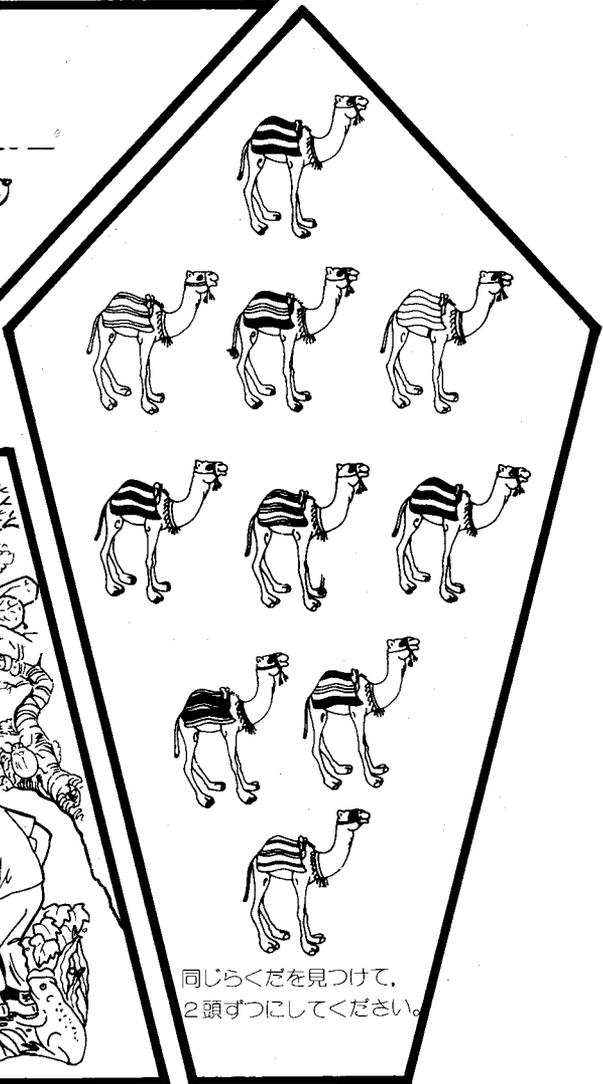
早くお父さんにこのゆめを話してあげよう。ゆめの中で、お田さんはにこにこしていた。前みたいにきれいだった。わたしは、お田さんのひざにすわっていた。お田さんのかみは、花のにおいがした。お田さんはわたしに、「幸せになつてね、またみんないつよになれるのよ。」と言った。とっても幸せだった。

びっくりしたことに、同じ日に、お父さんもお田さんのゆめを見た。お父さんは、あしたピクニックに行こうと言った。ふたりで。

# おもちゃばこ



あれさえなければ  
名犬なんだけどね



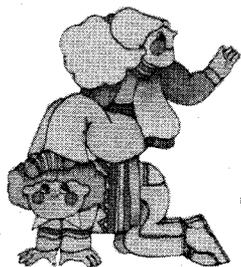
同じらくだを見つけて、  
2頭ずつにしてください。

どこにあるかな？

ふたりの男子が野球のボールをさがしています。ほかにも、えんぴつ、かぶと虫、ちょうちょ、バッタ、鳥、ぼうし、かめ、へび、かえる、かたつむり、ねずみなどがかくれています。いっしょにさがしてください。

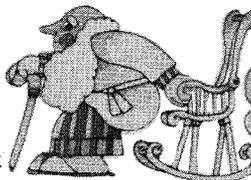


# みんながいるよ

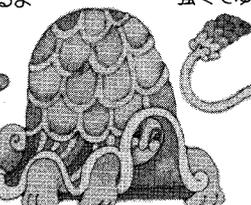


おなじ年のともだちもいるよ

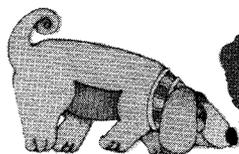
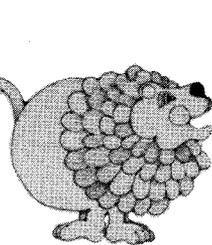
年をとったともだちもいるよ



強くてゆう気のあるともだちもいるよ

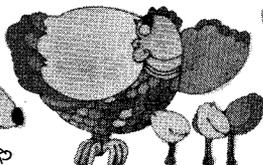


はずかしがりやのともだち  
もいれば、



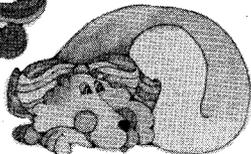
足が4つあるともだちや

2本しかないともだち、

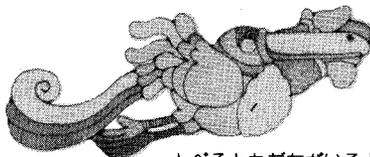


ヒンヒンなくともだちや、

ニャーニャーなく  
ともだちがいるよ

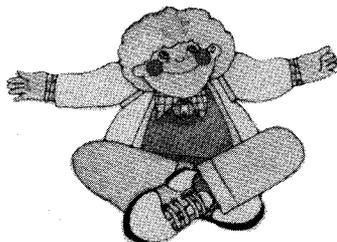


およげるともだち、



とべるともだちがいるよ

だからさ、ちつともさびしくないよ  
だれでもみんな、ともだちだもの



ものであったが、長い年月の間に、わかりやすく貴い多くの部分が抜き取られたといった事柄である。しかしモルモン経には、聖書の中から抜き取られた部分が回復されるだろうという予言もある。実際、「誰にも解る貴い」(Iニーファイ13:28)多くの記事が、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠、靈感によって訳された聖書など、ジョセフ・スミスに与えられた啓示を通して回復されてきたのである。

回復によって聖書の理解に役立つ多くの光が投げられ、聖書本来の姿が明らかにされてきたことは疑いを入れないことであるが、この回復と聖書との関係は、その逆もまた真なりと言える。すなわち、聖書が回復の業の中にあって果たした役割は、他に比較し得るものがない、必要不可欠のものであったということである。これは福音の基本的な教えの多くを見れば、よく理解できることである。

### 聖書と最初の示現

回復の物語は聖書に目を向けるという注目すべき出来事に端を発している。

「私は新約聖書ヤコブ書第一章第五節の『汝らの中もし智恵の欠くる者あらば、惜しむことなく、また咎むることなく、すべての人に与うる神に求むべし、されば与えられん』という所を読んでいた。

どの聖句にもまさって、この時ほどこの言葉が私の心に真に力強く迫って来たことはない。それは私の心の底と言う底を大きな力で貫き通すような気がした。私はこの

言葉を再三再四思いめぐらして、……ひとつ神に願ってみようと思った。」(ジョセフ・スミス2:11—13)

ジョセフの祈りは答えられ、人類の歴史上最も大いなる霊的な示しと言える顕現を授けられたのである。彼は御父とその御子にまみえ、言葉を交わした。この最初の示現を通してジョセフは様々な事柄を学んだ。その中でも大切な事柄は、祈りを聞きそれに答えて下さる神がおられるということ、また御父と御子は別々の御方であり、御二方とも人の形をしておられることである。回復された福音のこれらの基本原則はすべて、歴史的にも神学的にも、ヤコブ書第1章第5節と最初の示現とを接点にしてつながりを持っている。

### 聖書と天使モロナイ

最初の示現から3年後のこと、予言者は幾度か天使モロナイの訪れを受けた。モロナイがジョセフ・スミスに与えたメッセージの中で特に大切な事柄は、モルモン経を世に現わすことについてであったと思われるが、同時にモロナイは、聖書から多くの聖句を引用し、説明を加えた。この第一の目的は、年若い予言者に、主の末日の計画に対する備えをさせるためであったと思われる。

予言者の言葉から、モロナイがマラキ書第3、4章、イザヤ書第11章、使徒行伝第3章、ヨエル書第2章などを引用したことがわかる。しかしジョセフ・スミスは、モロナイがほかに多くの聖句を引用し、説明

を加えたと述べている。(ジョセフ・スミス 2: 36—41 参照) 予言者の記録からはそれが聖典のどこに当たるのかは明らかでないが、オリヴァ・カウドリが1835年の2月から4月にかけて「末日聖徒の使者とその唱道者」(*Latter-day Saints Messenger and Advocate*)誌上にこの件に関する一連の書簡を發表している。その中で彼は、天使モロナイの教えの主な目的は若い予言者に末日に地上で行なわれる神のみ業と、予言者の召しの大きさがいかなるものであるかその全体像を理解させ、そのみ業に備えさせることにあったと述べている。その教えの中には、旧約聖書からの聖句が大切な要素として含まれていた。オリヴァ・カウドリは、モロナイが引用し説明した聖句の一部として、詩篇100, 107, 144篇、それにイザヤ書1, 2章、エレミヤ書31章を挙げている。「末

日聖徒の使者と唱道者」第1巻第7号, 1835年4月, pp.109—112参照) ジョセフ・スミス自身の言葉によると、モロナイは幾つか聖句を引用し欽定訳聖書とは少々言葉を変えて話したという。(ジョセフ・スミス 2: 36—39 参照)

最初の示現とモロナイの教えとによって、ジョセフ・スミスは聖書への理解の目を大きく開かれた。彼はそれが神の靈感によって書かれたことを知ると同時に、中には原意を伝えるために訂正を要する箇所もあるということを知った。

#### 聖書とモルモン経の翻訳

予言者はモルモン経の翻訳に携わり、ひとつの言語から他の言語へ正確に訳していくことの難しさを身をもって体験した。確かに正しい翻訳は、みたまの導きと神の賜、

## 旧約聖書中の人物に関する ジョセフ・スミスの知識

福音の回復は、人の心に喜びを与える様々な物語の中でも最たるもののひとつに数えることができる。福音の回復の進展と共に、多くの人々が幕のかなたからジョセフ・スミスを訪れた。その中には旧約聖書にその生涯が紹介されている人々もいた。それらの人々について、ジョン・テイラー大管長はこう述べている。「アブラハム、イサク、ヤコブ、ノア、アダム、セツ、エノク、そしてイエス、天父、両大陸の使徒を初めとする弟子たち。ジョセフ・スミスは私たちがお互いを知っているように、これらの人々についてよく知っていたようである。」(*Journal of Discourses*「説教集」21: 94) また教義と聖約にはモーセ、エライヤス、エライジャ、また「ミカエルすなわちアダムより現在に至るまでの天使ら」が訪れたと記されている。(教義と聖約128: 21)

力によらなければできないのであるが、それに加えて翻訳者自身にもかなりの努力と思考が要求されるのである。

モルモン経に欽定訳聖書の言い回しが頻繁に出て来るのは、聖文の真意を伝えることの難しさがある程度物語っているようにも思える。

モルモン経は聖書を下敷にして書かれたものではない。しかし聖文の表現様式が、モルモン経の中でその多くの教えを伝えるための媒体として用いられていることは明らかである。モルモン経の中の言葉遣いや文体で、欽定訳聖書のそれと似ている箇所が数多く見受けられるが、これは聖書が回復の業のこの面で影響を及ぼしていることの表われである。

### 聖書と教義と聖約

聖書という言葉が教義と聖約の中で用いられているのは一箇所だけである。(42:12)しかし聖書からの引喩、聖書への言及は至るところにあり、聖書に似た表現は随所に見られる。

教義と聖約の中には、聖書の翻訳に関してジョセフ・スミスに与えられた啓示もある。例えば、いつから始めるか、いつやめるか、だれをその書記とするか、印刷はどうするかなどについての指示である。教義と聖約には聖書の本文の一部として組み入れられるべきものとしてではないが、この訳業に関連して与えられた啓示もある。76, 77, 86, 91章がそれである。132章などもこの範疇に属するものと言えよう。

教義と聖約には、それが聖書の翻訳に関して与えられたものであるということの頭に入れておかないと、その内容を理解できない箇所も数多くある。教義と聖約の初めの方にはモルモン経の翻訳に関連して与えられた啓示が幾つかあるが、(3, 5, 8, 9, 10, 17の各章)後の方には聖書の翻訳、その印刷予定などに関するものもある。35, 37, 41, 42, 45, 47, 73, 74, 93, 94, 104, 124の一部、また76, 77, 86, 91章の全節などがそれである。

教義と聖約には聖書に似た表現が至るところに見られる。例えば133章は内容、表現



ノア



アブラハム



エノク

共に、イザヤ書の63、64章と似通っている。両者が互いに相手を立証し、重要点においては内容、表現共に一致しているという認識なくして、教義と聖約をよく理解することはできない。事実、教義と聖約に載せられている啓示は、聖書の大切さとその中に述べられている真理とをはっきりと証しているのである。

#### 聖書と高価なる真珠

高価なる真珠の中で大きな部分を占めるモーセの書とマタイ伝24章は、ジョセフ・スミス訳の聖書からそのまま抜粋したものである。(このことについては後にも述べる) このように、標準聖典のかなりの部分が聖書と密接に関連しているのである。

#### 新しい訳とそれが教義の理解に寄与した点

予言者はその召しを与えられて間もなく、聖書の改訂を行なうようにとの主の指示を受けた。そして彼はこれを聖書の「翻訳」と呼んだのである。しかしそれは、聖書の言語に関する知識や、古代の写本、学者が

用いる手段や方法を駆使して行なう一般的な意味での翻訳ではなかった。ジョセフ・スミスの翻訳の進め方は、聖書が伝えんとする本当の意味を、啓示を通して明らかにするという方法であった。これが現在ジョセフ・スミス訳聖書として知られているものである。

この新しい訳が目指す主なところは、予言者の働きを通してもたらされる靈感による理解を人々に与えることにあるように思われる。この翻訳を通して彼は新たな知識、教義、原則を学んだのである。これがこの仕事の最も重要な目的のひとつであったのかも知れない。また、主が教義と聖約45:60—62に述べておられるこの翻訳の業の目的とも一致しているようにも思われる。

「われ汝らに告ぐ、この章に就きては新約聖書の翻訳せらるるまでもはやこれ以上汝らに知らせざれども、その新約聖書にはこれらのことごとく説き示されん。

この故にわれ汝に命じて今これを翻訳せしめ、以てまさに来らんとすることの備えを為さしむ。

われ誠に汝らに告ぐ、大いなる事汝らを待つ。」(教義と聖約45:60—62)

この聖句から明らかなのは、予言者が行なった聖書の翻訳は、すでに授けられていた啓示や知識を元にそれに訂正を入れていくというだけにとどまらず、その業をもって、まだ知らされていない事柄に関する新たな啓示を受けるための手段とすべきものであった。だれにもわかる貴い部分が回復されると約束されていたからである。以上の事実はややもすると見落とし勝ちであるが、予言者の聖書の翻訳の業について重要かつ貴重な示唆を与えてくれると共に、聖書の翻訳とこの最後の神権時代に行なわれる福音の教義の回復とを不可分の関係に結ぶものともなっているのである。

以下は、回復された福音の基本的な要素として、聖書の翻訳に携わっていたジョセフ・スミスに明らかにされたものである。

モーセの示現：予言者が聖書の翻訳をいつから始めたか正確な時期は明らかでないが、1830年6月に授けられた啓示と関連していることは明らかである。この啓示は「モーセの見たる示現」として高価なる真珠のモーセの書第1章に載せられている。この啓示はモーセ自身、またサタン、神、神の創造のみ業の目的などに関する大切な教えを含み、教義的、また哲学的、歴史的な価値は福音を学ぶ人々には広く知られているところである。この啓示には人の理性をはるかに超えた事柄が記されている。それはモーセが主の創造のみ業に圧倒されたくだりである。モーセは主に尋ねた。「願わく

は語りたまえ。何故にこれらのことかくの如きや。神は何をもてこれらのものを造りたまひしや、と。」主はこれに対して独り子の使命、最初の間人アダムについて説明し、主のみ業と栄光とは「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらし」ことであると教えられた。(モーセ1:30—39)

ここで与えられているのは「何故に」という質問に対する答えであった。それに対して創世紀にあるのは、「どのようにして」という観点からの記録である。したがってこの啓示は創世紀の序章とも言うべきものであり、この記録なくして創世紀の全体像を把握することはできない。

アダム：アダムは末日聖徒の神学の中にあつて特別な位置を占めている。予言者が翻訳した創世紀には、その家族、初めて福音を授けられた時のことなど、アダムについての注目すべき記述が数多くある。この記録は高価なる真珠のモーセの書3—7章、ジョセフ・スミス訳聖書の創世紀2—7章として公刊されている。私たちはジョセフ・スミスの訳を通して、アダムが犠牲を捧げた時に示した従順さ、熱心に子供たちに教えたこと、純粋なその言葉、バプテスマを受けた時の様子、ほかにも教義的あるいは歴史的に重要な事柄を知ることができる。

カインとサタン：ジョセフ・スミス訳の聖書の中に啓示されているのは、神や古代の義しい族長たちについての素晴らしい事柄だけではない。カインの反逆、カインとサタンまたカインの末裔の間に交わされた秘密の誓いについても多くのことが記され

ている。私たちが現在持っているカインについての知識は、創世記の初めの方の章を訳した予言者の働きに負っているのである。これらはモーセの書5章、ジョセフ・スミス訳聖書4章として公にされている。

シオンとエノク：シオンという概念は、族長エノクによって築かれた古代の町という意味においても、あるいは、まだ完成の途次ではあるが、この神権時代における主のみ業の一要素という意味においても、教会の神学の中で最も重要な位置を占めている。今私たちに知らされている、エノクやエノクの市に関する教えの多くは、ジョセフ・スミスが1830年の11月から12月にかけて創世記の初めの方の章を翻訳していた時に与えられた啓示によるものである。現在のモーセの書6、7章、ジョセフ・スミス訳の創世記6、7章がこれに当たる。1830年の11、12月に与えられたエノクとエノクの町に関するこれらの教えは、1831年の2月から8月にかけて与えられた教義と聖約各章の啓示の基礎となるものであり、その全体的な背景を形造るものである。(教義と聖約42—59章参照)

自分の行ないに責任をとれる年齢：現在の教会で最もよく知られている基本的な教義のひとつに、8歳になる前の子供は、自分の行ないの責任を問われることはないというものがある。モルモン経には、何歳になれば自分の行ないに責任をとらなければならないかということは記されていないが、幼な子は神のみ前に罪がないとはっきり書かれている。8歳になれば自分の行ないに

責任をとらなければならないということは、教義と聖約68：25、27（1831年11月に与えられた啓示）に記されているが、この聖句はこの問題について論じる時に必ず引き合いに出される聖句である。

しかしながら、予言者が1831年2月から5月5日の間に翻訳したとされている創世記17：11を見ると、責任をとれる年齢として、8歳と記されている。それは主がアブラハムに言葉を下された時のことを述べた聖句である。欽定訳とジョセフ・スミス訳を見比べてみよう。

(欽定訳)

創世17：7：わたしはあなた及び後の代の子孫と契約を立てて、永遠の契約とし、あなたと後の子孫との神となるであろう。

(ジョセフ・スミス訳)

創世17：11：わたしはあなたと割礼の契約を立てる、それはわたしとあなた及び後の代々の子孫の契約となるであろう。子供は8歳になるまでその行ないに責任を問われないということを、あなたが永遠に覚えておくように。

割礼とバプテスマの関係については明らかにしていないものの、ジョセフ・スミス訳は自分の行ないに責任をとることのできる年齢についてははっきりと述べている。

特に大切なのは、予言者の聖書のこの部分の訳稿に記されている日付から判断して、予言者はこの教えを遅くとも1831年4月5日、あるいは、教義と聖約68章として知られる啓示の中でこの教えが明らかにされるその5カ月前には知っていたという点であ



エライジャ



モーセ

る。また、福音の教義の中でも特に大切なこの教義がまず初めに予言者に、彼が創世記17章を訳していた時に与えられたことは明らかである。またこの教義はこの神権時代の福音の回復の業の中にあって、聖書が果たした重要な役割を例証するものでもある。

**3種の栄光の階級：**予言者に与えられた啓示の中でよく知られているものに、死からよみがえった後の人間の状態について述べたものがある。3種の栄光の階級の示現としてよく引用されるこの啓示には、栄光のない人々の状態についても述べられている。現在、教義と聖約76章として知られるこの啓示は、1832年2月16日、聖書の翻訳を進めていたジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリのふたりに与えられた、崇高で霊的な示現を記録したものである。ふたりはヨハネ伝の5章の訳にとりかかっていた。その時、天が開かれ示現を見たのである。その時の様子を教義と聖約76：15-19は次のように伝えている。

「われら、先に主の命じたまいたる翻訳

の業に従いつつありし時、ヨハネ伝第五章二十九節に至れり。誌されたるところはすなわち、

人の子の声を聞きて出で来る者に関する死者の復活のことを語りて、

善を為したる者は正しき者の復活によみがえり、悪を行いたる者は正しからざる者の復活によみがえるべし、と。

すなわち、この事われらを驚かせたり。そは、これ『みたま』によりてわれらに与えられたればなり。

われらこれらの事を思いめぐらせる時、主われらの覚りの眼に手を触れたまいたれば、われらの両眼開けて主の御栄あたりに輝やけり。」

この啓示は末日聖徒によって何度となく論じられてきたものであり、この神権時代に与えられた偉大な啓示の中のひとつに数えられるものである。実際、この啓示は教会の著作の中でも特に「示現」と呼ばれることが多い。予言者はこれを「永遠の世界の記録から書き写したもの」と呼んでいる。（「教え」p.11）特筆すべきことは、この啓

示は予言者が聖書の翻訳をしている時に与えられたということである。

日の光栄の位の結婚：回復された福音の特に素晴らしい面であり、聖書に直接結び付いた教えであることがすぐわかるものに日の光栄の結婚の教義がある。現在教義と聖約 132 章として知られる記録の中で明らかにされる数年前に、予言者がすでにこの教えを知っていたということはよく知られているところである。初期の兄弟たちの中には、1831、2 年頃にこの教えを予言者の口から聞いたことがあると証している人もいる。これが予言者が創世記の翻訳をしていたのと同時期のことであるということ、また 32 章の啓示の冒頭の部分にある、予言者がアブラハム、イサク、ヤコブのことについて主に尋ねたという記述から考えると、日の光栄の結婚についての啓示も聖書の翻訳に関連して与えられたのではないかと考えられるのである。

以上、自分の行ないに責任をとることのできる年齢、シオンの建設、福音の計画の中でのアダムの役割、栄光の階級、日の光栄の結婚の教義など、この神権時代に啓示された重要な教えの幾つかが、ジョセフ・スミスが進めた聖書の翻訳と密接な関係にあることを見てきたが、重要性という点において、これらをしのぐ主題を見つけることは非常に難しい。

聖書の翻訳に関連して、ほかにも重要な事柄が予言者に啓示されたということは、十分考えられることである。予言者が古代の宗教上の集いや教会の組織などについて

多くのことを知っていたこと、また聖書の翻訳に関連してほかにも多くの啓示を受けていたという事実を証明する事柄は多くある。

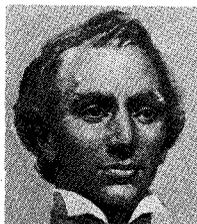
予言者の聖書翻訳の真の成果はジョセフ・スミス訳を残したというだけにとどまるものではない。その働きの所産として予言者にもたらされた（さらには予言者を通して教会に与えられた）多くの啓示、霊的な体験も忘れてはならない。ジョセフ・スミス訳も他の啓示も共に重要なものである。しかしその中でも、教義的に極めて多くの事柄を明らかにしてくれたというこの事実は何にも増して意味のあるところである。これらの啓示によって私たちは知識を増し加え、また神権、復活、前世の存在などについて明確な教えを得、イエス、アダム、エノク、メルケゼデク、アブラハム、パウロ、ペテロ、バプテスマのヨハネなどの使命に対してさらに深い理解が得られるようになった。これらの啓示なくして聖書の全容を明らかにすることはできないのである。

聖書が福音の回復の業の中にあって、必要欠くべからざる役割を果たしたことは、疑いを差しはさむ余地のない事実である。

ロバート・J・マシューズ：

ブリガム・ヤング大学古代聖典学助教授。  
教会コーリレーション委員会の委員も務めている。

# ジョセフ・スミス訳聖書



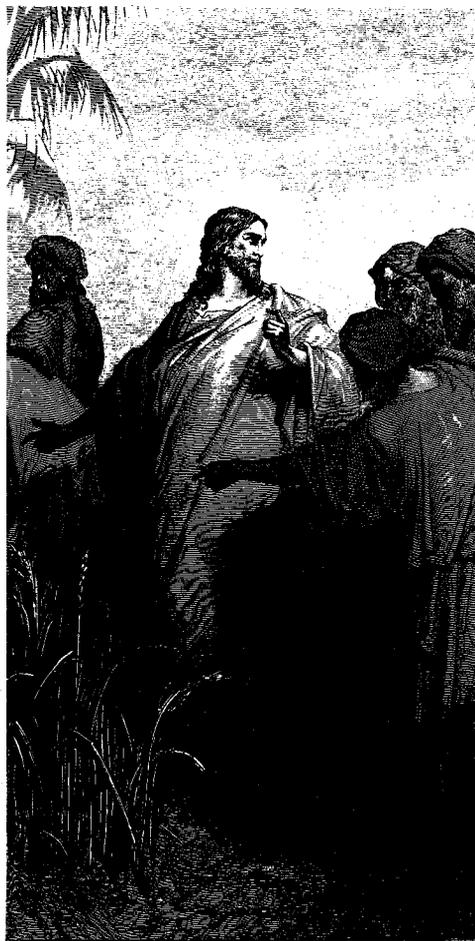
欽定訳聖書の改訂がジョセフ・スミスによって始められたのは1830年6月のことであった。それは神の命によるもので、ジョセフ自身もそれを予言者としての「召しのひとつ」と考えていた。1833年7月までには大半を終えていたが、その原稿を印刷に付す準備をしている間にも改訂を進め、1844年の死に至るまでそれを続けたのである。もし彼が生き長らえてこの仕事を完成していたら、ほかにも幾つか訂正が加えられていたと考えることができる。翻訳の中には予言者存命中に発行されたものもある。

予言者にとって、この翻訳の過程はひとつの学習体験であった。教義と聖約の幾つかの章は（教義と聖約に含まれていない啓示もあるが）この訳業の必然的な帰結として与えられたものである。（教義と聖約76, 77, 91章など）また教義と聖約37: 1 ; 45: 60—61 ; 76: 15—18 ; 90: 13 ; 94: 10 ; 104: 58 ; 124: 89などでは、この翻訳に関する特別な指示が与えられている。高価なる真珠に載せられているモーセの書、マタイ伝24章はジョセフ・スミス訳からそのまま抜粋したものである。この記事の出自となっている辞典を載せた版の欽定訳聖書には、その脚注にジョセフ・スミス訳の聖書からの抜粋が多く紹介されている。このようにジョセフ・スミス訳聖書は、聖書から失われただれにもわかる貴い記録の回復にかなり貢献しているのである。

ジョセフ・スミス訳は末日聖徒イエス・キリスト教会公認の聖書ではないが、多くの興味深い知識をもたらし、聖書を解釈、理解する上で貴重な助けとなっている。これは福音を学ぶ者に有益な知識を与えてくれる最も豊かな泉と言える。そして、予言者ジョセフ・スミスの召しと使命が神から授けられたことを証するものでもある。

# 新,旧約両聖書に見られる 不変の福音

エリス・T・ラスムッセン



**旧**約聖書には、多少未熟で不十分な神学概念や倫理が教えられていると考えている人がいる。これは、宗教を幾世紀もかけて発展してきた単なる社会規範と考える人々にとってはいかにももっともなことに思われるかもしれない。しかし宗教を絶対の真理と永遠と善悪を教える啓示された教え、神より与えられた倫理ととる人々にとって、旧約聖書のそうした考え方は論理的とは言えず、納得できないものである。

旧約聖書の人物に「悪い見本」が登場するが、いつの時代でも善人や良い習慣がある反面、悪人や悪い習慣も存在するものである。聖書の記録者たちは民やその行いについて良いこと、悪いことを卒直に書きつづったのであろう。ある意味ではそうした記述に幻滅を感じることもあるが、見方を変えれば、聖書の記事全体に対する真びょう性が増すとも言える。記録者たちは英雄、悪漢、民衆、王、予言者、祭司の善行、悪行を有りのままに記述したのである。

悪行がなされたところの記述では、記録者が主の道からはずれたための悪い結果を直ちに指摘することもあるが、数カ月、数年後に事の次第が明らかになってから結果や反応を書き留めたりする場合もある。普通後者の場合、エピソードだけを抜いて読めば、ずっと後に記されている結果にはなかなか気づかないであろう。聖書研究家さえ、時々後の方に書かれているその物語の結末を見逃してしまい、そのため間違っただけの判断をしてしまうことがよくある。創世34：25—31に記されているレビとシメオン

の暴挙の話は、責任ある人々の対応が後になるまではっきり知らされないひとつの例である。彼らの所業に対するヤコブの気持ちと永遠の報いについての指摘は、何章も後の創世49：5—7まで明らかにされないものである。また、これも当然のことながら、記事の記録者が暴力行為や不品行の結果を全然報告していない場合がある。そうすると困ったことに何も書いていないのだから容認しているのだととる読者が出てくる。しかしそれは間違っただけの考えである。主の予言者が、犯人がだれであっても不道徳を犯すことを是認したり、容認したりするとは考えられないからである。そのような罪悪を禁じる律法はすでに知られており、十戒の中でも強調されている。イエスも繰り返し説かれ、また近代の啓示の中でも述べられている。

また、王だから祭司だからといって律法をかいぐれると考えるのも無理な話である。モーセやダビデや後のイスラエルの王や祭司たちの例から見てもそれは明らかである。指導者が罪を犯すことがどれほど重大なことであるかは、ナタンがダビデに語っている通りである。「……あなたはこの行いによって大いに主を侮ったので、あなたに生まれる子供はかならず死ぬでしょう。」（サムエル下12：14）つまり、指導者が自ら悪事を働いた場合、善を唱道するはずの教えを人々は皮肉な目でしか見なくなってくるのである。

御存じのように、旧約聖書の有名な人物で、しかも罪を犯した人々として、ロトの

娘たちやユダ、ルーベン、シメオン、レビ、サムソン、アハズ、ウジヤなどがいる。個々の結末がどうなったかは一部の人についてしか知らされていないが、結果はおしなべてゆゆしいものである。詳細がすべてわかったならば、どう見ても全員同じ結果であっただろうと考えるしかない。こうして見ると、結局これらのことに関して、「天に於いて定められた一つの変らざる律法」（教義と聖約130：20）があるとしか考えようがないのである。

次に積極的な面から旧約聖書を見てみると旧約聖書には偉大な原則が述べられている。イエスは、この地上でみ業を行われた時、旧約聖書を用い、引用し、その言葉を人々に勧められた。

たとえば、主がサドカイ派の一部の人たちを、聖書を知らないと言って叱責された後の情景を思い出していただきたい。（マルコ12：24参照）質問者のひとりが、表向きにはイエスがモーセの律法の教えをどう見ておられるか知りたいというふりをしてこう尋ねた。

「『すべてのいましめの中で、どれが第一のものですか。』

イエスは答えられた、『第一のいましめはこれである、「イスラエルよ、聞け。主なるわたしたちの神は、ただひとりの主である。

心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。

第二はこれである、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」。これより大事な

いましめは、ほかにない』。

そこで、この律法学者はイエスに言った、『先生、仰せのとおりです、「神はひとりであって、そのほかに神はない」と言われたのは、ほんとうです。

また「心をつくし、知恵をつくし、力をつくして神を愛し、また自分を愛するように隣り人を愛する」ということは、すべての燔祭や犠牲よりも、はるかに大事なことです』。（マルコ12：28—33）

この愛という大原則は旧約聖書にも述べられている。現在の聖書の、申命6：4—5、レビ19：18やさらに申命10：12、30：6、レビ19：34にも記されている。

パウロもまた、ローマの兄弟たちにこのひとつの原則がすべてを包含することを次のように説明している。

「互に愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。

『姦淫をするな、殺すな、盗むな、むさぼるな』など、そのほかに、どんな戒めがあっても、結局『自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ』というこの言葉に帰する。

愛は隣りに人に害を加えることはない。だから、愛は律法を完成するものである。」

（ローマ13：8—10）

またガラテヤの改宗者たちにもイエスが言われたと同じことを繰り返してこう言っている。「……愛をもって互に仕えなさい。律法の全体は、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』というこの一句に尽

きるからである。」(ガラテヤ5:13, 14)  
ヤコブは旧約聖書のこの原則を「きわめて  
尊い律法」(ヤコブ2:8)と呼んでいる。

しかし今日、多くの人がこの戒めを新約  
聖書の教えと考えている。戒めを与えられ  
たのは確かにイエス御自身であるが、後にも  
述べるように、それは新約の時代よりはる  
か以前に与えられていたものなのである。

またその反面、本来旧約の教えではない  
にもかかわらず、良きにつけ悪しきにつけ、  
さも旧約から出たもののように言われてい  
るものがある。イエスはこう言われた「『隣  
り人を愛し、敵を憎め』と言われていたこ  
とは、あなたがたの聞いているところであ  
る。しかし、わたしはあなたがたに言う。  
敵を愛し、迫害する者のために祈れ。」(マ  
タイ5:43-44)「敵を憎め」というのを旧  
約聖書の引用だと思っている人がある。し  
かし、そうではない。これは、イエスが祈  
りに触れて非難された者からの言い伝えの  
ひとつに過ぎないのである。

事実、主がモーセに与えられた啓示の中  
には、敵のために善を為せという勧告の言  
葉がある。

「もし、あなたが敵の牛または、ろばの  
迷っているのに会う時は、必ずこれを彼の  
所に連れて行って、帰さなければならない。  
もしあなたが憎む者のろばが、その荷物  
の下に倒れ伏しているのを見る時は、これ  
を見捨てて置かないように気をつけ、必ず  
その人に手を貸して、これを起きなければ  
ならない。」(出エジプト23:4:5)

イエス御自身が「律法を授けたる者」(Ⅲ

---

「……愛をもって互に仕えなさい。  
律法の全体は、『自分を愛するよ  
うにあなたの隣り人を愛せよ』と  
いうこの一句に尽きるからである。」  
(ガラテヤ5:13, 14)

---

ニーファイ15:5)と言っておられるので  
あるから、旧約聖書に福音の教えがあつた  
ところで驚くことではない。それどころか、  
イサク、ヨセフ、エテロ、ヨシュア、デボ  
ラ、ルツ、ボアズ、ハンナ、サムエル、ヨ  
ナタン、ナタンといった旧約聖書の中の  
大勢の人々に、私たちは良い模範を見るこ  
とができる。

それは、次の聖句に述べられているよう  
に、新約聖書の主が旧約聖書の主と同じ主  
だからである。

「ただわたしのみ主である。わたしのほ  
かに救う者はいない。……

わたしは主、あなたがたの聖者、イスラ  
エルの創造者、あなたがたの王である。……

わたしこそ、わたし自身のためにあなた  
のとがを消す者である。わたしは、あなた  
の罪を心にとめない。」(イザヤ43:11, 15,  
25)

「わたしはあなたをしえたげる者にその  
肉を食わせ、その血を新しい酒のように飲  
ませて酔わせる。こうして、すべての人は  
わたしが主であって、あなたの救主、また  
あなたのあがない主、ヤコブの全能者であ

ることを知るようになる。)(イザヤ49:26)

イスラエルの民はエホバという神聖な名前を口にするのを避けて、しばしば別の呼び名を使用した。一般によく使われたのが、「我が主」という意味のアドーナイ (*Adonai*)、「み名」という意味のハ・シエム (*Ha-Shem*) も用いられた。また旧約聖書の中でも救い主を指す呼び名がいろいろと使われている。おもしろい呼び名に「ハーカドシ、バルク フ」(*Ha-Qadosh, Baruch Hu*) 「聖者よ、幸いあれ」という名前である。そのほかキリストの時代に使われた呼び名として「メIMUMラ」(*Meimra*) という名前もある。この名前は「メッセージ」または「言<sup>ことば</sup>」という意味である。愛弟子ヨハネはその福音書の記述の冒頭で、アラム語の慣用語を用いて「初めに言(メIMUMラ)があった。言(メIMUMラ)は神と共にあった。……」と記している。

イエスのことを「わたしは……有る」(ヨハネ8:58, 出エジプト3:14-15を参照)と言っているが、「わたしは有る」(ヘブライ語のエヘヤ [*Eheh*]) は文法的に「彼は有る」(ヘブライ語のイヘヤ [*Yiheh*]) に似ており、これがさらにイエホバ (*Yehovah*) と変化したと分析する人もいる。従って、肉体を持って生まれたエホバをイエスとするのである。しかし確信は聖霊による証を得た人々にしかもたらされない。パウロはこう述べている。……聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』と言うことができない。(Iコリント12:3)。

このように証することができる人はすべ

ての神権時代に通用する愛の福音の意味を一層よく理解することができるであろう。したがって私たちは、愛そのものや神に対する愛、お互いに対する愛の起源について新旧両方の聖書に記されている教えをさらに詳しく考察する必要があるのである。

イエスは言われた。「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」(ヨハネ13:34。エレミヤ31:3; Iヨハネ4:7, 19。ホセア11:1; 詩篇18:1-2, 97:10; 申命11:1; ヨハネ14:15も参照)

私たちは、エペソの聖徒たちのためにパウロが祈ったことが、私たちのためにも応えられるように願うものである。

「こういうわけで、わたしはひざをかがめて、

信仰によって、キリストがあなたがたの心のうちに住み、あなたがたが愛に根ざし愛を基として生活することにより、

すべての聖徒と共に、その広さ、長さ、高さ、深さを理解することができ、

また人知をはるかに越えたキリストの愛を知って、神に満ちているもののすべてをもって、あなたがたが満たされるように、と祈る。」(エペソ3:14, 17-19)

エリス・T・ラスムッセン

ブリガム・ヤング大学古代聖典学部長、および教会成人コーリレーション委員会委員。



## ナイジェリアとガーナ

### 神の使いよりも先に奇跡が

ジャネット・ブリガム

**数**年前から、ソルトレーク・シティーの教会本部に何通かの手紙が寄せられていました。それは、教会について知りたいので「聖なる書物」が欲しいという、短いながらも心に残る手紙でした。

消印を見ると、西アフリカのナイジェリアとガーナになっています。手紙の主は、と言うと、私たちの教会のことについてはほとんど何も知らないアフリカ人のキリスト教徒でした。でも、何も知らない彼らでも、私たちの教会についてもっと知る必要があることは理解していました。町や村の個人やグループにパンフレットが配られた時、彼ら黒人たちは福音が宣教師の口を通して宣べられる日が一日も早く来るようにと祈ったのでした。

そして1978年11月、ついにその日がやって来ました。 لندن・N・メイビー長老

夫妻とエドウィン・Q・キャンノン長老夫妻が、国際伝道部の特別な代表者としてナイジェリアとガーナへ派遣されてきたのです。それ以来、1,700名以上の人々がバプテスマを受けました。

メイビー長老の妻であるレイチェル・メイビー姉妹はこう述べています。「どの人たちも皆、主が備えて下さった熱心で霊的な人たちです。」メイビー夫妻もキャンノン夫妻も、高い改宗率を自らの功績とは思っていません。改宗者たちの生活の中に、はっきりと主のみ手を見ていたからです。

物語は、ほぼ18年前にさかのぼります。その頃、キャンノン長老が「異常な現象」と呼ぶ出来事が西アフリカで始まりました。アフリカ人たちが合衆国へ留学した仲間から教会のことを耳にするようになったのです。彼らは宣教師が持っている幾つかのパ

ンフレットを読むようになりました。1950年代にそのパンフレットがどういう経路でアフリカに渡ったのか、だれも知る人はいませんが、その影響には多大なものがありました。大勢の人がそれを読み、そして真理を知ったのです。そのうちナイジェリアとガーナの幾つかの黒人グループが他の人人の動きを知ることもなく、教会を真似て、独自の宗教組織を起こしたのです。しかし、教会設立のために正式の代表者を派遣することは、ビザの問題からできませんでした。

グループはそれぞれ小さな集会所を建てて定期的に集まりました。彼らは送られてきたパンフレットを基にして、できるだけ忠実に教会の組織、教義、歌、呼び名を真似ていくようにしました。時には、アフリカを訪れる教会員と会って教えてもらうこともありました。

そのうちアフリカ人たちが自ら伝道するようになりました。ある男性は驚くような霊的な経験をして「みたまにせかされ、街から街へと歩き回り、……モルモン経やパンフレットで読んだことを伝えて歩きました。」「迫害」があったり、時には「反キリスト教組織」とレッテルを張られたりもしましたが、いわゆる「アフリカ人宣教師」たちは決して負けませんでした。

ある人はこう言っています。「私たちはモルモン経やパンフレットに記されている言葉を宣べ伝え、その日40人の人々を説得して、周りのイスラム教徒から感心されたほどでした。」こうした「アフリカ人宣教師」と40人の改宗者は直ちに集まって教会の教義を勉強し始めました。それからしばらく

して、彼らは、「さらに47人の教会員」を改宗しました。

このようなことは、権能を受けないまま教会の名のもとに集まったグループにとって珍しいことではありませんでした。そしてナイジェリアとガーナのグループはお互いの動向は知らないまま、それぞれの国で末日聖徒イエス・キリスト教会の名称で登録まで済ませたのでした。

このようなアフリカ人の信仰心はやがてソルトレーク・シティの教会指導者の耳に入ってきました。次のような手紙が頻繁に送られてくるようになったからです。

「お願いです。この立派な回復された教会が偉大な予言者ジョセフ・スミスによって設立されたことを、私はいろいろと聞いてきました。またそのことについて本を読んでもっと知りたいと思っています。そんな折、クモラの丘でジョセフ・スミスに与えられた良き教えが記されているモルモン経のことを聞きました。主がお与え下さった教えについてもっと読めるように、モルモン経を1冊私に送っていただけたら、本当に幸せだと思います。

私は今、混じりっ気のない純粋なモルモンになりたいと思っています。モルモンについてもっと知りたいのです。……長老や牧師さんが……このガーナで私たちに聞かせて下さったほんの少しのことから、どこかにある光が見えてくる気がしてならないのです。

私は、『恐れず来たれ聖徒』や『来ませ王の王』などの歌や讚美歌、シオンの他の歌が教会の礼拝で歌われると、いつもうれし



ナイジェリア、アポフ支部の3人の扶助協会会員

くなります。そちらの皆さんと一緒に、キリストを信じる喜びを分かち合えたらと心から願っています。」この手紙を書いたのは、当時パブリックスクールの最高学年に在籍していたエマニュエル・ボンダでした。

またある人はこう書いています。「ここに  
いる私たちは神様の本当の子供です。天父  
やキリストを礼拝する時に肌の色など関係  
ありません。神のみたまがこの教会に入り  
なさいと私たちに呼びかけたのです。私  
たちを外に追い出すものなど何もありません。」

この手紙を書いたアンソニー・オビンナは、後に西アフリカの黒人の中で最初にバプテスマを受け、支部長に召されました。しかしそれ以前にビザの問題があったり、ピアフラ紛争で事態が一層複雑になりました。

1978年8月に、教会はキャンノン長老とブ

ナイジェリア、アポフ支部支部長会

アンソニー・オビンナ支部長(中)とふたりの副支部長、  
フランシス・オビンナ(左)、レイモンド・オビンナ  
(右)。3人は実の兄弟である。



リガム・ヤング大学のメリル・ベイトマンを、ナイジェリアとガーナのグループの実情調査をするために派遣しました。彼らは教会が必ず発展するというよい知らせを持って帰国しました。それから数カ月後に、キャンノン長老と夫人であるジャンナス姉妹がメイビー夫婦と共に西アフリカ担当の特別代表者に召されたのです。

両夫妻はまず、教会のことをすでに知っている人々を捜しました。彼らは教会を知っている人からも知らない人からも温かく迎えられ、熱烈な歓迎を受けました。また福音について、ほとんど英語で何の支障もなく話し合うことができました。

キャンノン姉妹はこう言っています。「この地で教会が成功した最も大きな要因のひとつは、英語を使えたことです。それに、皆さんがパンフレットを求めていたからだと思います。チラシや教材を心から読みたいと願っていました。以前、イギリスから来たカトリックやプロテスタントの宣教師が、ガーナやナイジェリアで伝道所を開いたり病院や学校を建てたりしていましたので、土地の人の中にキリスト教徒や英語の読み書きのできる人が多いのです。」

「キリスト教の宣教師を尊敬する伝統が残っていることもとてもよかったと思っています。」キャンノン姉妹はそう付け加えました。

メイビー長老は、アフリカ人の求道者を迎える時のことをこう話しています。「まずキンボール大管長のメッセージを伝え、私たちが与えたいものは救いと永遠の生命だけであるとお話しします。そしてこの世の富

についての約束は一切しませんでした。

世界にはさまざまな皮膚の色をした人たちがいて、背景もそれぞれ異なっています。私たちは自分たちを白人だと区別して考えたことはありませんでした。私たちはみんな天父に愛されている神の子供たちですと言ってきました。」

すでに教会について幾らか知っていた人たちは謙遜で、教会のやり方や教えをよく知ると、それまで使っていた十字架や献金皿をさっそく廃止しました。そして進んで時間やお金を犠牲にしました。

代表者たちがバプテスマを施した場所では、教会員たちがアフリカ人の建てた集会所を寄付しました。メイビー長老は最初の報告の中で、ガーナのセコンディにある建物のことを次のように説明しています。

「集会所はしっくい製の壁にブリキの屋根、セメントの床といった具合です。そこに古いピアノと幾つかの木製ベンチがあり、教会の絵がかけられています。おもしろいことに、集会所の外壁の端に色あせた字で、

『末日聖徒イエス・キリスト教会。1830年設立と書かれています。』この文字も建物も、今ではきれいに塗り変えられています。

ナイジェリアのイコト・エヨ村では、「(株)末日聖徒イエス・キリスト教会」と表示された建物の中で集会所が開かれています。250人程度の収容能力がある建物ですが、支部が組織された日の聖餐会には218名が出席しました。「現在そこには、集会所が建てられ教会員として確認を受けた人々が大勢集まっています。」メイビー長老はそう述べています。

この建物も数カ月前から手狭になり、あふれた人々は外で集会所を開いている有様です。

メイビー夫妻とキャノン夫妻は、教会の名前で集会所を開いている人たち全員と会う時間がありませんでした。ある時には、「親」教会の人たちと会うことができても、そこから派生した15の「支部」の人たちとはなかなか会うことができませんでした。その仕事は次の代表たちに残すしかないので、

キャノン姉妹は、立派な信仰を持った人



アボフ支部のごく一部の会員

人が、代表たちの来る前にすでに教会の方法を取り入れようと努力していたことを次のように説明しています。

「ひとつは彼らが教会の名称を使っていたことです。たいていの人は教会の教えについて幾らかは知っていましたが、教会の儀式の方法について何も知りませんでした。それで、プロテスタントが行なう五旬節の礼拝様式をそのまま使っていたのです。

献金皿もありましたし、五旬節で歌う賛歌やダンス、そして太鼓なども使われていました。もちろん、彼らにとってはそれで十分だったのです。私たちがただ行って『これはだめです』と言うだけで済むことではありませんでした。何をすればよいのか、教会の礼拝はどのようなものなのかを説明しなければなりません。時間がかかりました。新しいことを覚えるだけでなく、古い沢山のことを捨てなくてはならないのです。」

彼らが行なっていた礼拝の方法は私たちの教会ではあまり見かけないものだったの

ですが、キャノン長老によれば、「そのほとんどが教会の教えに反していないのです。例えば、人の話を聞いて特に共感を感じることがあるとすぐに『アーメン!』と言うのです。」

代表者たちがガーナのケープ・コーストで見た礼拝堂には、天使モロナイの等身大の像がありました。キャノン長老はこう言っています。「モルモン経の表紙にあるモロナイの絵をもとに、地元の彫刻家が作製したものでしょう。ラッパを口にし、球の上に立っているのです。」説教壇には、黒色の聖書とモルモン経が描かれています。ジョセフ・スミスの絵やタバナクル合唱団の写真も飾ってありました。

ある時、代表たちは何か導かれるものがあった、教会に興味があると聞いていたひとりの男性を捜し、ナイジェリアのオウェリという町から30キロ余り離れた村へタクシーで出かけたことがありました。土地の人に言われた通りに行くと、「L・D・S ナイジェリア伝道部」と正面いっばいに書か



ガーナのセコンディ支部の聖餐会

れた小さな建物に突き当たりました。「その時、ここだなと思いましたよ」とキャンノン長老は言います。この「伝道部」の創設者たちは、後にバプテスマを受けて教会に入りました。

教会に加わった人々は、それまで親しんでいた教会の真似ごとのようなことはきっぱりやめました。以前「教師」とか「使徒」と呼ばれていた人たちが今は地方部長会や支部長会の一員として働くようになり、「女子言者」と呼ばれていた女性は扶助協会会長となっています。

このような新しいアフリカの聖徒たちの多くは、英語を話し、洋服を着ていますが、それでも西洋化された人々ではありません。ほとんどの人が西洋よりもはるかに簡素な生活をしています。そして清潔で身だしなみがよく、しかも人を温かくもてなす彼らの習慣をととても誇りにしています。

現在、アフリカにも近代的な高速道路が建設されつつありますが、一般の道路は、それはひどいものです。町から町への距離は長く、運転は困難をきわめ、危険なところも多くあります。ガソリンの補給がひどく苦労ということもよくあります。

また通信手段が貧弱なため、教会の仕事が進まないことがよくあります。電話はよく不通になったり、不能になったりしますし、電報はあてになりません。州から州に出す手紙は何週間もかかります。

このように解決すべき問題はありますが、代表者や教会員たちはそれに負けてはならないと頑張っています。それに、ガーナやナイジェリアの友好的な国民性は、その他

の問題を十分補ってくれているようです。メイビー、キャンノンの両夫妻は、スペンサー・W・キンボール大管長に次のように報告しています。「これほど容易に人々が福音に引きつけられるところは、世界のどこを捜しても恐らくないでしょう。手を差し伸べさえすれば、機会はそこにあるのですから。一軒一軒戸別訪問する必要などありません。チラシを用意しておくだけでよいのです。せわしく通りを歩いている人でも、立ち止まって話してくれます。建築現場で働いている人でも、チラシを受け取ってくれます。そして、1時間ほどしてその現場を通ると、彼らがチラシを読んでいる光景を目にします。このようなことは、珍しくありません。」(「キンボール大管長、伝道活動のビジョンを語る」『聖徒の道』1979年10月号、p.149)

最近、ソルトレーク・シティーの教会指導者がナイジェリアとガーナの新しい教会員を訪問するようになりました。1979年2月にはジェームズ・E・ファウスト長老が、そして1979年4月には管理監督のピクター・L・ブラウン長老が新教会員の物質的援助の必要性を視察するために訪れました。イギリスからは地区代表のジョン・コックス長老がガーナを訪問しました。

西アフリカの聖徒たちは教会本部から地球をちょうど半周した所に住み、しかも扶助協会など教会プログラムはまだ始まったばかりですが、皆、強い信仰を持っています。その信仰は永年温めてきた希望の光の上に築かれたものであり、そして今、その希望が一步一步実現しつつあるのです。

# 実行！

七十人第一定員会会員  
ロバート・L・シンプソン



---

大管長の机上に示された座右の銘を、  
私たちはぜひ自分のものとしなければ  
ならない。

---

キンボール大管長の机にひときわ目立つように掲げられているのが、「実行！」という短い言葉である。この靈感豊かな指導者にとっては、個人の都合は二の次である。すべてのことが主の都合に合わせて行なわれている。働くということに関してキンボール大管長の模範はなかば伝説のようになっている。これはすべての教会員が従うべき模範である。

私が第2次世界大戦中にワイオミングの空軍基地に配属されていたとき、支部の聖餐会で、翌週の支部大会には、もしかしたらソルトレーク・シティから教会幹部が訪問して来るかもしれないという発表があった。次の日曜日の朝、私たちが支部大会に行くとき教会幹部が訪問したとのことで、ひとりの人が紹介された。だれもが初めて会う人だった。それが、十二使徒に召されたばかりで、支部大会訪問も初仕事のひとつであったスペンサー・W・キンボール長老であった。彼の物腰は穏やかで、証は堅く、語ることからしても、そのような大きな召しを受けるのもなるほどと思わせるものであった。そのとき彼は確信を新たに、このようなことを述べた。「兄弟姉妹たち、私は主がどうして私のような者を召されたか、よくわからない。しかし私には捧げることのできるタレントがひとつある。私の父は私に、いかに働けばよいかを教えてくれた。もし主が働き手を使いたいと望まれるとしたら、私はそのお役に立てると思う」と。確かに主は働き手を使われた。実際に主は、最も大切な時期に最も大切な責任を務める用意のある熱心な働き手を必要とされたのである。

今がその時である。いかに働けばよいかを知っている予言者が、行く手を導いている。そして確かな事実がひとつある。この末日の業には、予言者と足並みをそろえて進もうとする何千名もの人が必要だということである。

ひとりで歩む予言者は、力が無いに等しい。どの神権時代にも勤勉に働く優秀な弟子たちが必要とされてきた。今キンボール大管長は、教会歴史上これまでになく、熱心な働き手を大勢求めている。

私たちは予言者と足並みをそろえる用意の手始めとして、次の3つの目的を一緒に考えてみようではないか。

第一は教義にもっと精通すること、第二はもっと喜び進んで実行すること、第三はみたまの賜をもっと受けられるようになること。

ある立派な教師がある時こう言った。「読まない人は読めない人と何ら変わらない。」近代的な教授法の確立した文明の時代にあつて、福音に無学なことは言い訳が立たないと言っても、ほぼ過言ではない。特に水のバプテスマを受け、毎週聖餐を受けて誓約を新たにしている私たちにとってはそうである。

2番目の事柄は喜び進んで行なうことである。私は世界中の宣教師と会うときにいつもこのことで胸が躍る。学業や仕事を2年間中断し、家族や友人や自分の関心事を傍へ置いて、予言者からの召しにこたえることを生活の第一に置くのは、人間的に見て好都合なことだろうか。否。それでも、心は満たされるだろうか。然り、満たされる。人は何かを信じたならば、すぐさま実

行することである。

ここでしばしの間、私が半月前に南太平洋での集会に出席した間のメモをご紹介します。予言者からの勧告は決して軽んずべきものではない。トンガ・ヌクアロファステーキ部は、すべてのワード部、支部で聖歌隊を組織し、隣人もメンバーに迎えるようにというキンボール大管長の勧告に従った。つい先月、私とシンプソン姉妹はそのステーキ部の合唱祭に出席して非常に楽しい時を過ごした。全部のユニットが参加し、ある小さな支部などは、支部の全会員数とほぼ同人数の聖歌隊を結成していた。どこもかなりの数の非教会員が含まれていて、ある聖歌隊は3分の2までが求道者によって占められていた。どの聖歌隊でも、バプテスマを受けたばかりの人が歌っていた。そのほとんどは、聖歌隊に参加したことを契機としてバプテスマを受けた人であった。彼らは全員白い服に身を包み、よく訓練を積んでいた。霊的に高められた素晴らしい夕べであった。予言者の指示に従うことによって与えられる祝福が、如実に示された夕べであった。あなた方のワード部や支部に聖歌隊はあるだろうか。非教会員をメンバーに迎えているだろうか。それを実行しようではないか！

ここで、少しこのことを考えてみよう。御存知のように、教会には、7千以上のワード部や支部がある。そのワード部や支部が来年12か月間にひとつの家族を招き入れたとしたら、どうであろう。子供が2、3人いる家族と仮定してみる。その5人家族が聖歌隊に迎えられ、もし改宗できたとしたら、さらに3万5千人の改宗者を迎える

ことになる。何と素晴らしいことではないだろうか。それが、予言者の要請を実行した報いなのである。

御父の持つすべてのものを受け継ぐ志願者となった人々は、ホームティーチングの責任が、テレビ番組やこの世の関心事よりも重要であることを早く悟るべきである。静かな細い声が促すとき、私たちはそのことをしようではないか。すぐに実行しようではないか。

霊的な感受性は、喜び進んで最善を尽くそうとするすべての人に惜しみなく与えられる賜である。それは、仕えようという望みと、たとえ自分に好都合ではないと思えるときにも、第一歩を踏み出す勇気を持った人に与えられる賜である。私たちが自分の生活に執着拘泥すると、みたまの賜は失せてしまう。

救い主はごく簡単にしかも美しく教えられた。しかし、いわゆる近代文明は私たちの生活に様々な挫折を持ち込んだ。現代の社会環境は、大切な永遠の目的とおよそかけ離れたにせものを、私たちの生活にあまりに多く要求しているように思われる。

先日シンプソン姉妹と私はニュージーランドのオークランド市クィーンズトリートを歩いていて、波止場からそう遠くないある場所に来た。そしてそこでひと休みした。そのとき私は、最初の伝道中にちょうどその場所で起きたひとつの出来事を妻に話して聞かせた。

私の目にはあのときの光景がまざまざとよみがえってきた。群衆の中でひと組の年老いたマオリ人夫婦が、輸送船で戦いに出て行くマオリ大隊に手を振っていた。

老夫婦は、ひとりの青年兵士が彼らの方に笑顔を向けると、さらに大きく手を振った。マオリ語の会話から察して、孫息子の出征の見送りであることは明らかだった。

その戦争は、マオリの老人が青年兵士として出征した1800年代の戦争とは似ても似つかない、何千もの人々を一挙に殺りくする非道な武器を備えた戦争であった。間もなく青年の姿が見えなくなると、老人が妻の方を振向いて、少々皮肉めいてこう言った。「カタヒクアパケハタトウ。」「さあ、これでわしらも文明人じゃて」という意味である。

文明とは何であろうか。進歩とは何であろうか。一体何が大切で、何が大切でないというのだろうか。聖典には、神の道は人の道とは異なると教えられている。これ以上に真実を言い当てた言葉はない。

神が啓示された言葉によれば、この私たちの世界がある目的は、真実たったひとつで、それは単純明快である。それは何年かの年月をこの地上で過ごしにやってくるすべての人に、不死不滅と永遠の生命を得させることである。

知っての通り、不死不滅は、救い主の贖いの犠牲によって成就されている。人種や肌の色や主義、信仰、行ないの一切に関係なく、すべての人は死を越えて生き、無条件で神よりのその賜を恵まれる。

その次の、永遠の生命つまり昇栄を得るには、ひたすら各人がキリストの教えと神権の諸原則に従うことだけが必要とされる。しかしこれは不死不滅とは違って、各個人が永遠の最終目標をめざしてそれにふさわしい規律と生活態度を体得することが必要

なのである。

最も感銘深いのは、福音の真理が世界中の正直な人々の心に受け入れられていることである。救い主はその翼の下から、ひとりの人たりとも閉め出しはされなかった。それは現在の教会でも同じである。私の知人には、月曜日ごとに家庭の夕べのため早く帰宅するボストンの銀行員がおり、ペルーの山中に小さな農場を経営する素晴らしい兄弟がいる。トンガのババウ島に住み、カヌーでホームティーチングの召しを忠実に果たす若い父親がいる。彼の信仰は、仕事を愛し、熱心にホームティーチングを行なうロンドンの青年実行者と何ら変わらない。どちらも、喜び進んで実行しているのである。

あのマオリの老人が身に押し寄せてくるいわゆる文明というものについて、その真の価値は何なのかと問うてみることは、至極当然のことである。原子力と機械化のこの文明も、正しく利用するならば有益である。機械化と自動化で、人々に神の永遠の原則を教える時間がふえるならば、私たちはこの上なく豊かな恵みを受けるであろう。しかしただ悪い方向へ私たちの歩みを速めるだけならば、敵との戦いに負けるのである。

願わくは私たちに心を動かす力が恵まれ、力を奮い起こして、救い主の生涯と現在の地上の生ける予言者の模範に従えるようにならんことを。ただ実行することが、私の心からの祈りである。主イエス・キリストのみ名により、アーメン。

## ホームティーチングほぼ100パーセント達成

—日本大阪ステークス部—

ホームティーチングの成功例は本誌のローカルニュースでも時々紹介しますが、今回はステークス部長自らの目標と実践により、ほぼ100パーセントを達成した日本大阪ステークス部の例を皆さんにお知らせします。

これを実行したのは日本大阪ステークス部の中野正之ステークス部長。中野ステークス部長は以下のような目標を掲げ、ステークス部内の兄弟姉妹と一丸となって努力したところ、10月にはほぼ100パーセントのホームティーチングの達成率を見たとのこと。皆さんも参考にしてみてくださいはいかがでしょうか。

### 〈目 標〉

- ・ステークス部長自ら、毎月ステークス部内の監督、支部長宅を訪問し、目標について理解を求めると共に監督、支部長の家族とも親しくなる。
- ・「家族」のパンフレットや「主の宮居」のフィルムを用いて神殿参入の大切さについて指導する。
- ・ステークス部長自ら、毎週金曜日に神殿に参入する。
- ・ステークス部神権会を開いた後、すぐ女性の集会を開いて、同じテーマで姉妹たちをも指導し、神殿参入の重要性について夫婦が家庭で話し合えるようにする。
- ・副ステークス部長は各高等評議員の家庭を訪問し、各ワード部、支部の神権指導者もそれぞれ神権管理系統に準じる兄弟たちの家庭を訪問するようにする。
- ・ホームティーチャーと訪問教師は、各家庭で、神殿参入に必要な資格について家長に正しく教え、家族が神殿の祝福を得られるように助ける
- ・ホームティーチングプログラムと家庭訪問プログラムを相互調整する。
- ・教会法廷を厳正に行なうようにし、法廷の開き方、カウンセリングの仕方について指導する。
- ・12月に2度、バスによる神殿訪問を行なう（12月13日、12月27日）

聖餐会出席数とホームティーチング100パーセント達成状況

月	家族数	聖餐会出席数	ホームティーチング訪問件数(%)
3月	1791	516人	286 (16)
4月	1803	548人	499 (18)
5月	1986	593人	603 (30)
6月	2091	609人	1041 (41)
7月	2278	656人	1302 (57)
8月	2310	691人	1488 (64)
9月	2282	752人	1357 (60)
10月	2321	792人	2301 (99)



## “忘れずに青年の時智恵を得よ”

日本・韓国地域教育部長  
鈴木正三

「いまの大人は、人間の内面にひどく無神経になっている、と思うことがある。子どもの外側を整えることには大へん熱心だが、その内側に目を注ぐことには、いささか怠慢な大人がふえている。」「朝日ジャーナル」(55年12月5日付)「大人たちが偏差値とか一流校とか、そういう外側を整えることに熱中すればするほど、抑制力の鍛練はおおきなりになる。」「朝日新聞」天声人語(55年12月2日付)最近家庭内暴力、校内暴力が多発しており、天声人語氏が指摘しているように、内面の訓練にもっと目を向ける必要があると思います。私たちの子供たちはこうした環境の中で生活しており、友人からさまざまな影響を受けています。親として、神権指導者として、若人に対する教会教育の立場をもっと明確にする必要があります。アルマは「わが子よ、忘れずに青年の時智恵を得よ、青年の時から神の命令を守ることを習慣とせよ」と教えました。世の中がどんなに厳しい受験戦争の中にあっても、「先ず神の国とその義を求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられる」との主イエスの約束をよく理解していただきたいと思います。

セミナー・インスティテュートプログラムは、生ける予言者が、将来の神の王国における立派な指導者の養成のために力を注いでおられるプログラムです。私たちが、養うようにと神から任された子羊たちに、もっと福音を積極的に学ぶ機会を与え、そ

れを達成するためには犠牲をも払うようにチャレンジする必要があります。犠牲と試験は成長への偉大な鍵です。

たとえどんなに厳しい受験戦争でも、まずセミナーを学び、それから学問を学ぶ時、主はその人の信仰をほめ、理解力を増し加えて下さると、私は自分の子供たちの経験やセミナーの生徒たちの証を通して知っています。信仰生活は全身全霊を尽くして行なうようにと主が求めておられます。大人の変な同情心から子供をセミナー・インスティテュートに登録させずに塾通いを優先させるのは非常に危険です。私たちは外側を整える事にばかり目を奪われず、神が福千年の準備のために送られたこれらの若人たちを、神のみこころにそって育てることが大切です。

次に、若い兄弟姉妹はセミナー、インスティテュートで学んだことを生活に取り入れましょう。そうすると両親にとってより良い息子、娘となります。自分の時間を有効に用いるよう計画をし、福音の勉強も学校の勉強も熱心にしましょう。福音の勉強の時だけでなく学校の授業の始まる時も、主の導きを祈り求めましょう。神は必ずあなたを祝福されることを知っております。

4月からの新学期に、教会教育部は3つのコース(63ページ参照)を用意しており、各ワード部、支部で担当者が登録を受けつけております。多数の方が登録して下さい。

	指導主事	担当ユニット	登録数	
			セミナー	インスティテュート
北海道地区	大田原 勝幸	札幌, 札幌西ステーク部 札幌伝道部	117	695
東北地区	渡辺 豊	仙台ステーク部 仙台伝道部	40	291
関東地区	井上 龍一 赤松 成次郎	東京, 東京北, 東京東, 高崎ステーク部 東京北伝道部	267	1,168
京浜地区	吉野 和洋 謝花 良康	町田, 横浜ステーク部 東京南伝道部	178	539
中部地区	安芸 宏	名古屋, 名古屋西ステーク部 神戸伝道部	160	230
関西地区	土田 勝	大阪, 大阪北, 神戸ステーク部 名古屋伝道部	249	1,008
中国・四国地区	西原 里志	岡山伝道部	440	806
九州地区	井木 正信	福岡ステーク部 福岡伝道部	208	1,059
沖縄地区	伊佐 善明	沖縄ステーク部		

堀田 徹 (現在札幌伝道部長)

昨年9月30日現在の教育プログラムへの登録数です。(数字は左がセミナー, 右がインスティテュートです)

なお, インスティテュートの中にはレギュラー・インスティテュート, 個人学習, 生涯教育が含まれています。



大田原 勝幸



渡辺 豊



井上 龍一



赤松 成次郎



安芸 宏



吉野 和洋



謝花 良康



土田 勝



井木 正信



堀田 徹



伊佐 善明

プログラム	テキスト	年齢	登録料
セミナー	新約聖書	14-17歳	1,000円
個人学習	歴代大管長	18-25歳	1,500円
生涯教育	歴代大管長	26歳以上	2,000円



モルモン・タバナクル合唱団やオズモンズなどに象徴されるように、末日聖徒は一般に音楽を愛好する民として知られています。音楽に情熱を燃やす兄弟姉妹たちの姿が、グループとして、また個人として私たちの周囲によく見られることからそれはうなずけるのではないのでしょうか。

今回はその音楽にまつわる話題をふたつ取り上げてみることにします。



☆キルヒエン室内合唱団・合奏団の演奏会☆

## クリスマスの夕べを飾るバロック音楽



音楽による伝道と、教会員の音楽水準の高揚を図ることを目的に結成された『キルヒエン室内合唱団・合奏団』の定期演奏会が昨年12月21日(日)夜、東京第4ワード部で催されました。今回は一昨年に引き続いで2度目の公演。地元の教会員の中にはすでにこのグループを知っている人々も多く、会場はその演奏を楽しむ人々で一杯になりました。

プログラムは『バッハの夕べ』と題し、

チェンバロ協奏曲二短調、カンタータ第152番、カンタータ第62番——。クリスマスを祝うにふさわしいこのプログラムは、集まった方々に宗教音楽の真髄を味わっていただくまたとない機会となりました。流麗な響きのチェロ、典雅で独得な音色のチェンバロなどが織りなす調べ。その中にソプラノ、アルト、テノール、バスの独唱や合唱が入り見事というほかありませんでした。

この「キルヒエン(独語で「教会」の意)

室内合唱団・合奏団」は1978年の夏に結成され、現在30名ほどで構成されています。団長は岡田松雄兄弟、指揮者は清水正幸兄弟、伴奏者は岡本正紀兄弟。合唱団と合奏団の中には教会員でない人も数名おりますが、いつも、賛助出演を買って出てくれます。合唱団は、毎週日曜日に日本東京ステーク部のステーク部センターに集まり、練習を重ねているとのこと。

団長の岡田兄弟は今年の4月にはヘンデ

ルの「メサイヤ」を発表したいと意欲を燃やしています。そして今後、今以上に力をつけ、将来は多くの宗教曲を手がけながら、対外的にも大いに働きかけていきたいと抱負を語ってくれました。

今回の公演は大成功でした。私たちはこの機会を感謝すると共に、「キルヒェン室内合唱団・合奏団」が地元の人々に愛されるグループとしてこれからも活躍されるよう心より祈っています。

## 帰還宣教師のコールマン兄弟 日本のレコード界へデビュー!

# 末日聖徒イエスキリスト教会



コールマン兄弟の  
〈プロフィール〉

年 齢：22歳

趣 味：コイン収集、天体観測

スポーツ：アイススケート、水上スキー、テニス、野球その他

好きな歌手：カーペンターズ、オズモンズ、野口五郎、布施明その他大勢

昨年10月まで日本東京北伝道部で専任宣教師を務めたジョセフ・クイン・コールマン兄弟。彼は、このほど日本で初の歌手としてデビューすることになりました。3月25日に日本フォノグラムよりレコードが発売されます。またNHK「レッツゴーヤング」やフジテレビ「夜のヒットスタジオ」など、数多くの歌謡番組への出演も予定されています。

伝道中のコールマン兄弟の思い出は、すべてが歌に尽きること。音楽好きな5人の宣教師と共にグループを結成し、自ら作った曲を伝道部内40カ所以上にもわたって公演したことは生涯忘れ得ない経験となっています。今後とも、歌を通じて人々の心に主の愛を感じさせたいと抱負を語るコールマン兄弟。伝道の気持ちを持ち続けてレコード界に入る彼を私たちは絶大なる拍手をもって応援したいと思います。

「わたしはあなたと契約を結ぶ。  
あなたは多くの国民の父となるであろう。  
あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、  
あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。  
わたしはあなたを多くの国民の  
父とするからである。……」

（創世記17：4-5）

